318

448

始

人工/T-10
318-448

帝國圖書館藏

愛國尚武論

偕行社編纂部發行

大正
10. 1. 6
寄贈

著者寄贈本

緒言

本書は予か曾て隊附勤務中部下青年將校及下士兵卒の精神教育に資するの目的を以て編述したるものに若干刪正を加へたるものなり

本書引用書目の主なるものは中村大將著軍人勅諭講義、丸山氏著軍人勅諭義解、古事記、玉禪、士道、弘道館記述義、傳習錄、劉氏人譜、「普留達克」英雄傳竝に佛人「亞佐理英兒」氏戰論、同「亞爾白爾壽」氏愛國論とす

大正五年二月

編者識

愛國尚武論（勅諭私解）

陸軍少將　松井庫之助謹述

我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある。

我國とは皇國（ミクニ）なり軍隊とは部伍編成したる陸海軍團體なり世々とは歴代なり　天皇は卽ち　皇國の元首至尊なり　皇國に於ては歴代の至尊は天祖の後裔なるを以て天ッ日嗣と稱し又天皇とも唱へ奉る是外邦の普通の皇帝と異なる所なり統率とは統督率帥なり。

私かに案するに　皇國の始めて國を建つるや政體正純文武一途國民擧つて皆兵にして　天皇之か大元帥たり大臣大連之か將佐たり天下事あれは　天皇必す征伐の勞を親らし給ひ否らさるも皇子皇后代りて之に當り敢て兵馬の大權を臣下に委ねられたることあらす又其の臣僚は概ね皆軍事に通曉し大政輔弼の道に於て閑然する所あらさりき

昔神武天皇躬つから大伴物部の兵ともを率ゐ中國のまつろはぬものどもを討ち平け給ひ高御座に卽かせられてより二千五百有餘年を經ぬ。

神武天皇は　皇國人皇の始祖なり大伴は大伴氏の一族なり大伴氏は天忍日命（アメノオシヒノ）より出つ命の玄孫道臣命は神武天皇の東征に其の一族を率ゐて道を啓き賊を討せり物部は兵器を携ふる部族の謂にして後世軍人を「もののふ」と云ふは是に出つ主なる物部氏は饒日命（ニギハヤヒノ）に出つ兵は鏘（ツハモノ）物の義にして武器を携へ軍務に從事する將士を總稱す中國は國の中央部なり「まつろはぬものども」とは神を祭らす皇上に服從せさる輩を云ふ高御座とは皇位なり。

私かに案するに　皇祖神武天皇卽位紀元前七年日向國に在しまして諸ろの皇子に詔し給へり其の要旨に曰く遼遠の地未た王澤に霑はす邑に君あり國に長あり各自境を分ちて以て相凌轢す朕將に之を統一

して民を漆苦の中に救ひ以て天業を恢弘せんとすと乃ち舟師を率ゐて東征し給ひ安藝、吉備、浪華を經て大和に至る長髓彥なる者あり是より先き饒速日命の子可美眞手命（ウマシマテノミコト）を奉して主となし皇師を孔舍衞（クサエノ）阪に邀へ戰ふ皇兄五瀨命流矢に中り薨し給ふ　天皇卽ち轉して八十梟帥（ヤソタケル）を國見丘に攻めて之を誅し復た長髓彥を攻めらる時に天俄に陰り氷を雨らす會たま金色の靈鵄あり來りて皇弓の弭に止まる其の光曄煜狀ち大流電の如し虜兵迷眩復た力戰する能はす饒速日命は素と天神の裔なり是に於て歸順せんと欲す長髓彥從はす饒速日命輙ち長髓彥を斬り衆を帥ゐて以て降る　天皇之を赦して重用し給ふ實に物部氏の祖なり乃ち將卒を遣り國中の諸賊を討伐し辛酉元年大和國畝傍山の東南橿原宮に於て位に卽き給ふ是に於てか道臣、可美眞手命等梓弓手に執り持ちて劍、太刀腰に取り佩き儼しく近衞の軍務を管掌す爾來皇統連綿凡そ百二十二世を歷て　今上陛下に至る明治十五年一月四

日卽ち本勅諭御下賜の日迄に實に二千五百四十二年を經たり。

此間世の樣の移り換るに隨ひて兵制の沿革も亦屢なりき。

私かに案するに神武天皇御卽位より今日迄二千五百有餘年の間には世の形勢も種々に變遷し之に隨ひて陸海軍の制度も數〻改正せられたり以下其の沿革を宣へ給ふ。

古は天皇躬つから軍隊を率ゐ給ふ御制にて時ありては皇后皇太子の代らせ給ふこともありつれと大凡兵權を臣下に委ね給ふことはなかりき。

私かに案するに神武天皇東征以降凡そ九世の間は天下太平にして兵革のことを聞かさりしか崇神天皇の御宇に至り四方に皇化に順はさる者出てけん所謂四道將軍を北陸、東海、西海、丹波の諸道に差遣せられたり然れとも其の大綱は天皇親ら之を握らせ給へること固より論な

し景行天皇の十二年筑紫の熊襲叛す天皇親征之を平け給ひしか二十七年熊襲又叛せしかは皇子日本武尊をして之を征せしめ給ふ四十年東夷叛くに及ひ又尊をして之を討平せしめられたり。

仲哀天皇の御宇熊襲又叛す天皇皇后と共に親征して未た克たれす中道にして崩御し給ふ皇后以爲らく熊襲の屢〻叛するは其の背後に新羅の支援あるか爲なりと是に於て皇后意を決して新羅を征し給ふ神功皇后卽ち是なり。

齊明天皇の御宇新羅唐の援を借り百濟を滅せんとす百濟援を我に請ふ天皇卽ち舟師を率ゐて西征し筑前朝倉の宮に至り軍事を統督し給ひしか行宮に於て崩御し給ひ雄圖遂に成らさりき。

以上述へたる如く神武天皇の御東征より大化の改新まて大凡千三百年間國中國外皇化に從はさるものあれは天皇躬ら之を征し或は皇后皇太子をして代て之を討伐せしめ給へり時として他の將軍を差遣せ

られたることあるも天皇親ら其の大方略を指導せられたること論を俟たず殊に神功皇后、齊明天皇の如きは女皇にておわせしも躬ら軍隊を統率せられたるは皇國の制度の自ら然らしめたる所なるへし。

中世に至りて文武の制度皆唐國風に倣はせ給ひ六衞府を置き左右馬寮を建て防人なと設けられしかは兵制は整ひたれとも打續ける昇平に狃れて朝廷の政務も漸文弱に流れけれは兵農おのつから二に分れ古の徵兵はいつとなく壯兵の姿に變り遂に武士となり兵馬の權は一向に其武士ともの棟梁たる者に歸し世の亂と共に政治の大權も亦其手に落ち凡そ七百年の間武家の政治とはなりぬ。

中世とは猶中古と云ふか如し大化の改新より武家の世となるまての

間を概括して宣へるなり唐國とは支那なり昔し支那は文化大に開け皇國の文物制度支那より輸入せられたるもの多し六衞府とは左右衞門府、左右衞士府、左右兵衞府なり今の近衞諸隊に該たる、左右馬寮は左馬寮、右馬寮なり貢馬を蓄ふ防人は崎守の義にして今の要塞守備隊に當る。

私かに案するに孝德天皇の御宇新に左右大臣及内大臣の職を置き始めて年號を建て地方分權の制を改めて中央集權となし從來臣連等の領有せる土地人民を檢收し臣民私有の兵器を集めて之を其の國の兵庫に納めしめたる等改新せられたる所少なからす嗣て天智天皇位に即き給ひ新に律令を定め對馬、筑紫、等に防人(防備隊)烽燧(監視哨)を置き城を大和、讃岐、對馬等に築き、筑紫の根據地に水城(ミズキ)を築かる又多く牧場を設けて軍馬を育成し兵を近江に閲せられ戒嚴して外寇に備へらる其の他學校を興し戸籍法を定むる等唐國の制度を取捨折衷せられた

り文武天皇大寶元年に至り天智天皇の創定し天武天皇の改定せる法令を大成せらる之を大寶律令と云ふ當時の制たる兵部は八省の一に居り邊要の國には諸郡に皆軍團あり一國の壯丁を三分して其の一を取り五人を伍となし伍二を火となし火五を隊となし隊二を旅となし旅十を團となし各之に長を置けり一火に六馬あり騎射に慣れたる者は特に騎隊となし皆守令に命して簡閲點呼し或は京都を守衛し或は要塞を戍らしむ凡そ征行萬人なれは乃ち將軍あり副將軍あり軍監あり軍曹あり錄事あり三軍を總帥するに大將軍一人をおく大將出征する時は必す節刀を授けられ軍に臨み敵に對し部下命令を遵奉せさる者あれは皆專決を聽るさる凱旋の日には狀を具して申告す勳位十二等を定め功を論し賞を行ひ而して其の兵を罷めらる其の制度大略此の如し上世に於る國民皆兵の趣旨に及はさること遠しと雖も其の亂を防き禍を慮かること亦詳密なりき是より數朝の間邊境幸ひに事な

く文學技藝の進歩に至りては前古無比と稱せらる之を奈良朝時代となす然れとも其の古制に背叛し唐制に倣ひ文尊武卑の制度を採用せる結果として朝政漸く文弱に流れ奢侈を貴み法令行はれす嬖臣跋扈し忠良罪を得るもの多く西邊東陲稍穏かならさるに至れり光仁天皇大に綱紀を振張し桓武天皇其の後を承け都を山城に遷し精を勵まし治を圖り又阪上田村麻呂をして東夷を討平せしめ治績大に擧かれるも藤原氏文臣を以て政柄を執るに及ひ世々其の女を容れて皇后となし天子の廢立其の意に任せ故らに幼帝を擁立し百官多くは其の一族を以て之を埋め廟堂の上務めて恬淡を取り文華を尚ひ風流に耽り弓馬刀槍は徒らに修飾の具となり古來尚武の風地を拂ふに至れり故に諸國の兵士軍衙に徵せられ或は拔擢せられて京師を守護するものも自然驕奢華美の風に感染し輕薄に流れ文弱に陷り歸鄉の後は鄉黨に擯斥せらるるに至りしかは心ある者は人を傭ひ名を冒かして上京せ

しむるに至れり是に於て軍衛の徴兵名ありて實なく近衛の將士は賊を防き戰ふ能はす之に反し東山、東海諸道般富の百姓才能弓馬に堪ゆるもの平常質素を旨とし武藝を習ひけれは天下事ある毎に政府符を下して此等の勇士を徴募するに至れり故に此等の武士は弓馬を以て專業となし羸弱の農民は耒耜を執るの外軍事に干與せす兵農自ら二つに分れ徴兵の制度は漸次廢弛して壯兵の姿となり名門貴族の國司等に任せられたるものは任滿つるも京に歸らす領地を擴め郎黨を集め以て群雄割據の端を開けり。

殊に源平二氏の如きは素と皇室の華胄にして名望大に高く部下を愛撫し恩威竝ひ行はれたるを以て隱然として武士の棟梁たるの觀を呈せり加之源氏には滿仲、頼光、頼信等平氏には貞盛、正盛、忠盛等の名將續出し殊に源頼義、同義家は前九年、後三年の兩戰役に於て櫛風沐雨粉骨碎身以て奥羽の亂を鎮定せしも朝廷其の功を察せさるのみならす却

て之を私鬪となし之を責罰せんとするに至りしかは頼義、義家私財を抛ち將士を慰藉し以て僅に事なきを得たり是に於て關東の將士は源氏あるを知りて復た皇室あるを知らず因襲の久しき殆んと君臣の如くなるに至れり是時に當り藤原氏は依然政柄を握り卿相の位其の族人に非されは與へす官流閥を論し因習俗を成し庶僚百揆概ね其の職を世々にし頼義の大功ある如きも猶位正四位下に止まれり而して源氏の命に抗するものあれは平氏に勅して之を討し平氏に制し難きものあれは源氏に令して之を誅せしめ更る〳〵相箝制して以て控馭の術を得たりと爲し古制を敗壞し一時に苟偸し而して其の勢の積重して復た回へらさるを悟らさりき故に平田篤胤は此時のことを記して

（聖德太子の攝政し給へる頃より唐風を用ひ給ふこと盛にして古の天皇命（ミコト）たちの御身親ら御馬に乘（ノラ）し御弓を執（トラ）して山狩し給ひ背けるものを征伐し給へる英武の道を陋（イヤシ）として戎（エビス）王等か强（シ）ひ高ふれる趣に倣ひ

まして其の威儀を用ひ給ひ天下の權を藤氏の臣等に委ねなして文を重むし武を卑むる制度を立て給ひし故に文官の人は功無きも上位に居て下を侮り武官の人は功あるも下位に居て上を恨み是に因りて文武の開相和せず)と云ひ又頼襄は(抑も軍事は民命の繫かる所にして兵馬の權は一日も皇室を去るへからす皇祖皇宗の必す躬之を親らせる其の旨深し今之を一二の宗族に委ね又其の事を賤みて省みす其の品類を別らて之を朝廷の上に齒せさるに至る甚しきは之を奴隷視して曰く是武門のみ是武士のみと其の功を論し賞を行ふに及ひても或は恪みて與へす嗚呼幾何か其れ相率ゐて以て自ら法度の外に棄てさらんや特に積威の約する所となり抑へて敢て發せさるのみ)と云へり。

保元平治の亂平清盛武功を以て太政大臣となりしも復た藤原氏に倣ひて官爵を私し一族大臣大將となり驕奢華靡偏頗暴横の所爲多かりしかは以仁王の令旨は忽ち諸國に伏在せる源氏を煽動し頼朝は伊豆に、義仲は木曾に起り頼朝の弟義經は遂に平氏を西海に壓迫して之を殄滅す然るに頼朝覇府を鎌倉に開くや名を義經の不悌に藉りて征夷大將軍となり朝廷に逼りて諸國に守護を、莊園に地頭を置き公領を私有し文武の大權を私せり源氏は三世にして亡ひたるも北條氏執權として其の緒を繼き皇族を奉戴して以て天下の權を左右せり後醍醐天皇英邁の天資を以て一たひ北條氏を滅し大權を收め給ひしも幾もなく政道偸安賞罰正しからす諸國の武士の心を失はれれは足利尊氏は頼朝の故智に倣ひて自ら征夷大將軍となり別に皇統を擁立して天下の大權を私し之より若干歳月の開皇統二分の形勢をなせり其の後ち天下復正足利氏室町に在りて政柄を執りしも部下の諸將皆其の上長の僭上に倣ひ叛亂絶ゆることなく遂に世は戰國割據の時代となれり即ち甲州には武田氏あり越後には上杉氏あり中國には毛利氏あり九州には島津氏等ありて龍戰虎鬪兵亂息むときなかりき。

織田信長尾張に起り皇室を貴ひ百姓を撫し殆んと天下を統一せんとせしも逆臣光秀の爲に弑せらる豐臣秀吉不世出の英資を以て其の遺業を繼き全く天下を統一して根據を大阪に定め猶明、韓を征伏して之を皇國に併合するの雄圖を抱きしも不幸にして中途に薨去し事遂に就らざりき。

德川家康は元と豐臣氏に屬せしか秀吉の歿後威望獨り隆きに及ひ豐臣氏恩顧の諸侯同盟して之を除かんことを圖れり家康之を關ヶ原に破り尋て豐臣氏を大阪に滅せしか遂に政權を朝廷に奉還するに至らす府を江戸に開きて天下の政柄を私せること約三百年卽ち賴朝覇府を鎌倉に開きしより　先帝御卽位元年卽ち王政復古の年迄に約七百年を經たり。

世の樣の移り換りて斯なれるは人力もて挽回すへきにあらすとはいひなから且は我國體に戻り且は我祖宗の御制に背き奉り淺ましき次第なりき。

私かに案するに　皇國に於ける立國の性質上、軍隊は　天皇の統率し給ふへき者にして之を臣下に左右せしむるは斷して容ささる所なり然るに時勢の變遷已むを得さるか如しと雖も兵馬の權漸次武門に移り隨て天下の大權も亦之に歸し鎌倉となり室町となり大阪となり江戸となり　天皇は唯空位に備はるか如きに至りたるは實に恐懼の次第にして後鳥羽天皇の恢復を圖られ事成らさりし時北條は　天皇御謀叛等と稱して遠島に遷し奉るに至れり豐臣氏は天下を統一し德川氏は昇平を致せしも大權は已に久しく全く武門に移り如何ともする能はさりき此の如きは我建國の性質に戻るのみならす　皇祖皇宗の定め給へる制度に背き奉り慨歎の外あらさりきされは平田翁は(保元の亂より後ち源平の武士立分れて朝威を憚らす合戰をなし天下亂れに亂れて終には武家の世とそ成ける其は武官を卑むこと甚しく古意

に違ひけれは武を要とする古の道に復へし給ふ皇神たちの神慮ならんとそ所思ゆる)と云へり。

降りて弘化嘉永の頃より徳川の幕府其政衰へ剰外國の事とも起りて其侮をも受けぬへき勢に迫りけれは朕か皇祖仁孝天皇皇考孝明天皇いたく宸襟を惱まし給ひしこそ忝くも又惶けれ。

「降りて」は猶其の後と云ふか如し弘化は仁孝天皇御宇の年號嘉永は光明天皇御宇の年號にして後安政と改元せり「剰」とは其の上の義なり皇祖は「おほぢのみこと」と訓し　先帝の御祖父を云ひ皇考は「ちちのみこと」と訓し　先帝の御父君即ち　聖上陛下の御祖父を云ふ「いたく」は猶甚しくと云ふか如し「宸襟」は大御心なり「忝く」とは勿體なき意「惶けれ」とは恐れ多しとの意にて惶懼の至りに堪へすとの御意なるへし。

私かに案するに德川氏は鎌倉室町の故智を襲き陽はに皇室を尊ひ陰

かに王權を抑へて刑政の權を專にし又鎖國の主義を取り巨艦軍船の製造を禁し外國との關係を絶ちたるを以て國内は靜謐にして太平無事なるか如くなりしも戰略戰術は勿論軍事工藝の如きも大に世界の進歩に後るるを免れす殊に五代將軍綱吉の頃に至りては皇國固有の美俗即ち勤儉質素武を尚ひ恥を知り義を重んするの士風漸く衰へ驕奢淫逸の俗大に起るに至れり八代將軍吉宗一たひ幕府を刷新せりと雖も太平の久しき武備は徒らに其の形骸を存して其の精神を失ひ衰亡の兆隱然として已に萠せり然るに文化元年露人「レサノット」長崎に至り我漂民を送還して通商を請ひたるとき幕府露使を諭して之を拒みしか四年露艦二隻擇捉に寇し我戍兵を襲ひ又通商を逼れり。

弘化二年に至り米艦二隻颶風に遭ひ漂流したりと稱し相州浦賀に來り薪水を求め且通商せん事を請へり幕府薪水食料を給し通商を拒絶せしも嘉永二年英艦又浦賀に來り六年米國艦隊司令官「彼理」は該國大

統領の書簡を齎らし艦隊を率ゐて浦賀に入り書を幕府に致して回答を逼り進みて神奈川に碇泊せり是に於て幕府始めて大に驚き諸侯に命して武相房總伊豆の沿海を守備せしめ明年を期して決答すへきを約し纔に米艦を去らしめたるも此歳露國艦隊亦長崎に來り求交の國書を呈せり幕府は急遽砲臺を品川沖に築き敵に備ふる所ありしも固より以て敵を防くに足らす安政元年米艦又來り英蘭二國も亦國書を幕府に送り求むる所あり同年露國の艦隊大阪灣に入り轉して南海を巡り下田に至りて答書を求む然るに幕府は久しく太平の夢を貪り武備を怠りたる結果として兵制戰術艦船築城兵器凡て歐洲の進歩に後るること甚しく亦如何ともする能はす一歩を誤るときは國家の安危測るへからさるに至れり但し草莽には先見卓識の士林子平渡邊華山佐藤信淵の如き夙に國防の必要を唱道したるものありしも多くは幕府の嫌忌に觸れ其の志を伸ふる能はさりき幕府は遂に專斷を以て米、

英蘭露諸國と假條約を結ひ而して天下の群議を鎮靜する爲勅允を請ふに至れり是より先き德川光圀高山彦九郎蒲生君平賴山陽本居宣長平田篤胤の如き皇室の式微を慨し幕府の僭權を憤るの士或は著書に或は言論に尊王の大義を唱道し天下の人心を鼓舞作興せしかは是に至りて諸國の志士竝ひ起りて尊王の說を唱へ幕府の優柔を攻擊して已ます幕府は外外國に當るの武力なく內志士の正論を壓服する能はす遂に安政の大獄を起して國家有爲の士を逮捕せしか之か爲却て人心を激昂せしめたり。

皇室に於ては從來兵馬の權を全く幕府に委任あらせられたるに幕府は昇平に狃れて兵備を修めす奢侈驕怠唯其の祿を食みて其の職を曠うし一旦外患あるに當り何事をも爲し能はさるを見られけれは時の天皇卽ち　聖上陛下の御曾祖父仁孝天皇御祖父孝明天皇太く聖慮を惱まされたるこそ恐懼の次第なれ殊に孝明天皇は御年十有七にして

即位せられ天資英明にましましけれは内外多事の際宸襟を惱ませられしこと一方ならす伊勢の大廟を始め全國の神祇に國運の長久を禱らせ給へり御製を拜誦するも如何に御心を國事に勞せられたるやを拜察するを得へし曰く(皆人の心の限り盡してし後こそ賴め伊勢の神風)(朝な夕な民安かれと思ふ身の心にかかる異國(コトクニ)の船)と叡慮誠に此の如くなりしかは文久三年將軍家茂の上洛拜謁となり石清水の行幸となり下關及鹿兒島灣の砲戰となり遂に大和行幸御親征の擧とならんとして行はれす七卿の脱走となり長州征伐となれり然るに天皇は王政復古の成功を御覽あらせられすして崩御し給ひしこそ遺憾なれ實祚僅に二十年なりき。

然るに朕幼くして天津日嗣を受けし初征夷大將軍其政權を返上し大名小名其版籍を奉還し年を經すして海内一統の世となり古の制度に復しぬ。

天津日嗣とは大統なり即ち皇位なり大名小名は即ち大小の諸侯なり土地を有すること多きを大名と云ひ其の少なるを小名と云へり版籍は即ち領土、戸籍なり。

私かに案するに　先帝陛下御年僅に十六歳にして大統を繼かせ給ひけるか此時外交の事未た局を結はす公武の間亦未た合體するに至らす是に於て踐祚の初め有栖川親王、五卿等國事の爲に罪を得たるものを免るされ又兵庫港を開きて信を外國に表し給へり時に征夷大將軍德川慶喜大政を返上し且其の解職を請ひけれは　天皇之を嘉納し給ふ嗣て島津、毛利、鍋島、山内、佐竹等の諸侯連署して版籍を奉還するに及ひ大に官制を改め封建の制度を廢して郡縣の制度に復せらる是に於てか七百年來武門に移りたる政權再ひ朝廷に歸し海内一統の世となるに至れり但し其の間奥羽の亂、函館の戰ありしと雖も皆速に鎮定し期年ならすして王政復古の大業は成れり。

是文武の忠臣良弼ありて朕を輔翼せる功績なり歴世祖宗の專ら蒼生を憐み給ひし御遺澤なりといへとも併我臣民の其心に順逆の理を辨へ大義の重きを知れるか故にこそあれ。

良弼とは賢良なる輔佐官なり輔翼は車輪鳥翼の如く輔佐載奉するなり蒼生とは人民を云ふ御遺澤とは先王の遺されたる御恩澤なり順逆の理とは大義名分を正しくするの道理を云ふ。

私かに案するに　先帝陛下天位を踐せ給ひし節は内憂外患竝ひに至り國家危急の際なりしかとも聖德高遠賢を擧け能を用ひ給ひしかは文臣に於ては三條實美、岩倉具視、木戸孝允、大久保利通、武將に於ては有栖川宮熾仁親王、小松宮嘉彰親王、大村益次郎、西鄕隆盛、桂本武揚、山縣有朋卿等忠誠を盡し聖謨を翊贊し以て維新の大業を造成せり加之古來皇國歴代の天皇仁慈を以て天下を治め給ひしかは其の德澤人心に浸潤すること極めて深く牢乎として拔くへからす賴朝、尊氏以下勢威赫灼たる武臣も皇威を藉らされは何事をも爲す能はす故に或は征夷大將軍の名を假り或は皇子を請ひて之を奉戴し或は別に朝廷を建つる等の手段を以て天下の人心を籠絡せさるを得さりき此の如く我日本國の臣民は深く　皇室の神聖を知り勤王は臣民の大義なることを辨へけれは版圖政權一朝にして之を奉還して毫も異とせす明治中興の大業は著々進捗したりしなり然りと雖も斯る大業は　先帝の允武允文る聖德に依らされは安そ此の如く速に成就するを得ん然るに　先帝は之を以て歴世の御遺澤、將相の功績、臣民の忠良に歸し給へり則ち其の　御聖德の至大至宏なる測るへからさるものありしを知るに足らん。

されは此時に於て兵制を改め我國の光を耀さんと思ひ此十五年か程に陸海軍の制をは今の樣に建定めぬ。

私かに案するに明治元年兵馬の大權を朝廷に收め給ふや軍防局を置

き次て兵部省と改稱し大に軍制の整備を圖り給ふ明治四年薩長土三藩の兵を東京に徵して御親兵となす是近衞兵の濫觴なり尋て各藩の兵を解散せられ更に東京、東北(仙臺)、大阪、鎭西(熊本)の四鎭臺を置かれ要地に分營を設置し各藩より鎭臺兵を徵召せらる是に於て兵權一に歸し中央政府の基礎確立し廢藩置縣を斷行するに至れり五年兵部省を廢し陸海軍兩省を置き士族の兵職を解き徵兵の制を定め又陸海軍條例を定めらる六年全國を區劃して六軍管となし各軍管に鎭臺を置き東京、仙臺、名古屋、大阪、廣島、熊本を以て其の司令部所在地と定めらる同年始めて徵兵令を布かれ完全なる軍隊を編成す七年始めて步兵聯隊に軍旗を授與せられ又北海道に屯田兵を設けらる八年沿海を東西の兩海軍區に分ち九年鎭守府の制度を定め東海鎭守府を橫濱に設置せらる十年西南の亂あり陸海兩軍之を鎭定す十一年陸軍軍務を三大部に分ち陸軍省、參謀本部、監軍本部を置き十三年電信隊を設けらる嗣て

明治十五年步兵十四個聯隊を增して二十四個聯隊とするの計畫を定めらる。

以上は　先帝御卽位以來明治十五年迄の兵制沿革の概要なり

夫兵馬の大權は朕か統ふる所なれは其司々をこそ臣下に任すなれ其大綱は朕親之を攬り肯て臣下に委ぬへきものにあらす。

司々とは各職掌なり大綱とは大本なり例之は猶網の大綱の如し其の綱を擧くれは其の目自ら張ると謂ふもの是なり。

私かに案するに軍隊統帥の大權は　陛下の掌握せらるる所にして唯其の細目のみ便宜上之を臣下に御委任せらるるなり例へは軍政は陸海軍大臣に、軍令は參謀總長、軍令部長に、敎育は敎育總監、敎育本部長に分掌せしめられ軍隊の統率は各團隊長に分任せらるるか如し然れとも其の大本は悉く聖斷に出て決して臣下の私する所にあらさるなり

現に我　大元帥陛下の常に軍服を著用せられ常に軍務を御親裁あらせられ又　先帝陛下の明治十年の亂には京都に、明治二十七八年戰役には廣島に大纛を樹てられ又明治三十七八年戰役には東京に大本營を設置せられ親しく六軍の嚮ふ所を指揮し給へるは皆此大方針に則らせ給へるものと知るへし。

子々孫々に至るまて篤く斯旨を傳へ天子は文武の大權を掌握するの義を存して再中世以降の如き失體なからんことを望むなり。

子々孫々とは皇子皇孫乃至臣民の後裔をも併せ宣へるならん義を存しとは理義を心に銘して忘れさるなり中世以降の如き失體とは大權臣下に移り爭亂相繼き又は文弱に流れ外侮を受けんとせるを云ふ。

私かに案するに兵は國の大事、死生の地、存亡の道なり一國の國政之より重要なるものなし何となれは兵力張らされは外交振はす兵力の保護なき時は法律は一片の空文たるに過ぎさるへく農業工藝又は貿易も常に外人の壓迫を受け絶えて發展の餘地なかるへし故に軍事を度外視して一國の政事を云爲するか如きは誤れるの甚しきものなり(軍人は濫りに政治に拘るへからさることは後文之を述ふ)軍事の重要なる夫れ此の如し然るに其の大權を一二の宗族臣下に委ね捨てて顧みられさるか如きは失政の大なるものにして政治の大權は自然臣下に移るに至り隨て又之か競爭者を生し爭亂相繼き人民塗炭の苦を受くること、我中世以降の狀態に徵して明かなり。

今や　皇太子殿下を始め奉り皇族諸殿下は殆んと凡て陸海軍務に御勵精あらせらるること此　聖諭の御趣旨に由るものと知るへし。

朕は汝等軍人の大元帥なるそされは朕は汝等を股肱と賴み汝等は朕を頭首と仰きてそ其親は特に深かるへき。

私かに案するに此　聖諭莊嚴凛として犯すへからさるの中亦吾人軍

人を親愛せらるるの御意靄然として言辭の外に溢る大正元年の御勅諭にも朕か股肱たるの實を擧け以て皇謨を扶翼せむことを期せよと宣はせられたり之を拜承して誰か感奮興起せさるものあらんや昔は藤原保昌、渡邊綱、卜部季武、酒田金時、碓井貞光は源頼光の股肱と稱せられ又赤松則祐、村上義光、片岡八郎等は護良親王の股肱と稱せられ其の名聲嘖々今猶人口に膾炙す然るに我　大元帥陛下は上は將官より下一兵卒一水兵に至るまて畏くも　陛下の股肱と宣はせ給ふ吾人軍人たるもの誰か粉骨碎身以て此無上の榮譽を全うし聖恩に報い奉らさるものあらんや。

朕か國家を保護して上天の惠に應し祖宗の恩に報いまゐらする事を得るも得さるも汝等軍人か其職を盡すと盡さるとに由るそかし。

上天は神靈なり「まゐらす」は敬語なり奉ると云ふに同し

私かに案するに　皇國は巍然として世界大陸の東方に卓立して山水明媚五穀豊饒海洋四周して自然の城を成し歐米人士の所謂旭日帝國として欽羨嘆賞措かさる所なり　皇祖皇宗統を垂れ基を定められしより金甌無缺茲に數千年是實に上天神靈の加護に因るものなり。

此の如き世界無比なる皇國に一點の瑕瑾を加へす以て祖宗在天の神靈に對し其の恩惠に酬い給ふことを得るも得さるも一に汝等軍人の其の職分を盡すと盡さるとに由ることにて汝等軍人にして忠良に又誠實に其の職分を盡さは　朕は國家を保護して　祖宗在天の恩惠に酬い奉ることを得るとの仰なり吾人軍人たるもの上將校より下兵卒に至る迄豈惶れ畏みて各報効を勵み以て　聖諭に酬い奉らさるへけんや。

我國の稜威振はさることあらは汝等能く朕と其憂を共にせよ我武維揚りて其榮を耀さは朕汝等と其譽を偕にすへし。

稜威とは神聖なる威光なり振ふとは四隣を震[illegible]揚るとは皇國の武威世界に發揚するなり。

私かに案するに此　聖諭の前段は皇國の威光振はす他國の凌辱を受くるか如きことあらは汝等軍人能く朕と其の憂を共にせよとの御意なり古語に曰く君辱めらるれは臣死すと皇國由來皆此道を守れり赤穂四十七士の如きは實に其の模範たり近世二三醉歐者流の之を云々するか如きものあるも其の淺見固より取るに足らす四十七士の芳名遺烈は永久百世に傳はりて朽さるへし唐の杜甫亦曰へることあり獨り至尊をして社稷を憂へしむ諸君何を以てか昇平に答へんと今一團隊を以て之を例せんに將校下士以下皆其の團隊の名譽休戚を心とすること其の團隊長と同一なるに於ては該團隊の良成績は期して待つへきなり其の否らさるものは部下其の上官と憂を共にせさるか爲なり數千年來皇國無疆の鴻恩に浴せる吾人は縱令　陛下の此　聖諭なきも萬一皇威振はすして外侮を受くるか如きことあらは萬死を期して國難に當るへきこと固より言を待たさるも此の如き　聖諭を辱うせるに至りては誠に感激の外なしと謂ふへし過る戰役間東鄕大將は決戰に際して巧に此　聖諭の御趣旨を喚起し以て敵艦隊を殲滅せり曰く(皇國の興廢此一戰に在り各員一層奮勵努力せよ)と

後段は皇國の威光發揚して武名八表に轟くに至らは朕汝等と名譽を共にすへしとの御意なり實に明治二十七八年、同三十三年及同三十七八年戰役の如き當時歐米人士の眼中に置かさるか如き我國土の小なるにも關せす世界最大若くは最强と稱せらるる大國と戰ひ我將卒は能く　聖諭を服膺し奮戰力鬪死を見ること飴の如く連戰連勝以て全世界の耳目を驚倒せり是に於てか世界は我　皇の至聖至德を瞻仰するのみならす吾人一般國民に對し俄然尊敬の心を起せることは皆人の知る所ならん殊に在外の同胞は深く此趣味を解するならん試みに外人

に向て言へ予は旅順戰に參加せり予は奉天戰に參加せりと即ち外人の尊敬驚喜如何なるへき日本人なる名稱は已に業に外人の畏敬を博するに堪へたり加之　皇室に於ては戰後漏れなく戰死者負傷者を救恤せられ又功勳者に勳章金員を下賜し給へり是亦本　聖諭の御趣旨に出つるなり但し此に注意すへきは稀に此行賞の厚薄當否を云々するものあること是なり是大なる誤謬にして又陋劣なる心情を暴露するものと謂ふへし實に吾人の戰に臨み奮戰力鬪するは數千年來無疆の鴻恩を受けたる　皇室の御爲なり我祖先の經營し且遺骨を埋めたる國家の爲なり恩賞を受けんか爲にはあらさるなり唯　陛下の御賜は一葉の紙片と雖も無上の光榮たることを服膺するを要す。

汝等皆其職を守り朕と一心になりて力を國家の保護に盡さは我國の蒼生は永く太平の福を受け我國の威烈は大に世界の光華ともなりぬへし。

私かに案するに職分を守ることは人世に最も貴重すへき道德の一なり即ち兵卒は兵卒、下士は下士、將校は將校、海軍は海軍、陸軍は陸軍、工兵は工兵、步兵は步兵等各其の階級職責に應して其の分を盡し協心戮力以て軍隊の任務たる國家の保護に全力を注かは國家の基礎强固にして決して他國の侮蔑を受くることなく工藝之に賴て發達し商業之に賴て繁榮し士民其の堵に安んし而して其の餘澤遠く外邦に及はん是即ち前に宣へる如く　陛下を頭首と仰き吾人軍人は其の手足となりて奮勵努力するの結果なり。

去る明治二十七八年戰役、同三十三年の事變、同三十七八年戰役の際吾人軍人は能く此　聖旨を服膺し奮戰努力したるを以て一戰役を經る毎に我國の威烈は更に一層の光輝を加へ遂に今日の國運の隆盛を來たせり然れとも世界の進運は決して吾人の偸安を許さす又世界には往々道德を守らさるの國あり又眞理を解せさるの徒あり何時如何な

る變亂を惹起するやも測り難きを以て吾人は深く本　聖諭の御趣旨を奉戴し以て他日に備ふること緊要なり。

朕斯も深く汝等軍人に望むなれは猶訓諭すへき事こそあれいてや之を左に述へむ。

私かに案するに以下の　聖訓は前陳の御趣旨に基かれ吾人の身を修め心を養ふへき事項を訓へ示されたるものにして其の事たる高尚深遠然も行ひ易く守り易く實に天地の公道人倫の常經なり歐米人士の如きも之を譯し之を誦し嘆稱措かさる固とに故なきにあらさるなり。

一、軍人は忠節を盡すを本分とすへし。

軍人とは上元帥より下一卒に至る迄凡て軍務に從事するものを總稱す忠は中なり中心より起りて誠意誠心我大君に事ふるの謂なり又字象より之を觀るときは忠の字は口と心とを一線を以て貫けり即ち言語と心志との一致を要求するか如し節とは操即ち二心なきを謂ふ要するに忠節を盡すとは死を以て我大君に事ふるの謂にして孔子の所謂君に事へては其の身を致すなるもの是なり。

私かに案するに君臣、父子、夫婦は人の大倫なり然るに支那にては其の俗最も父子の親を貴ひ歐洲にては主として夫婦の愛を重んす之に反し皇國に於ては古來君臣の義を以て最大の德義となし忠君の心は天性に出つ是我國體の然らしむる所にして世界萬國に其の比を見さる所なり故に忠節を盡すは日本臣民の大義なり況や干戈を執て君國を護衛する軍人に於てをや昔し大伴氏の祖先は(海行かは水つく屍山行かは草むす屍、大君の邊にこそ死なめ長閑には死なし)と歌ひ又將軍實朝は(山は裂け海はあせなん世なりとも君に二心われあらめやも)と咏したり是皆我祖先の誠忠無比なる我國民獨特の精神氣魄(即ち大和魂)を發露したるものなりとす。

凡生を我國に稟くるもの誰かは國に報ゆるの心なかる

へき。

私かに案するに本文には軍人は忠節を盡すを本分とすへしと宣ひ此聖解には報國心の必要を說き示し給ふ要するに忠節を盡すも國に報ゆるも　皇國に於ては全く同一なり蓋し君に忠なるは卽ち國に報する所以にして國を愛するは卽ち忠節を盡す所以なれはなり故に或は忠君愛國と云ひ或は盡忠報國と云ふ其の語異なるも其の意は卽ち一なりと知るへし。

我國と宣へるは　皇國(ミクニ)なり神洲なり則ち我皇祖皇宗の肇造し給へる所約言すれは祖國なり祖國とは何そ吾人の生れたる家なり吾人の呱々として乳を索めし所なり吾人の曾て釣遊せし清流なり吾人の鄉里なり鬱蒼たる古木に圍繞せらるる所の神社佛閣なり猶之を詳言すれは春陽に爛熳たる所の櫻花なり秋風に淪艷たる所の稻田なり巍然として天に聳ゆる所の富嶽、鳥峰なり洋々として平野を環る所の刀水、貢

河なり此等市街、村落、河川、原野、山嶺、溪谷、普天の下、率土の濱、苟も我　天皇陛下の君臨し給ふ大日本國の領土は一として我祖國にあらざるものなし此秀麗豐饒なる國土所謂神洲は幾千年來我　皇室の統治せられたる所又我祖先の辛苦して經營し其の遺骨を埋めたる所なり然れとも以上陳へたる所は是單に地理學上の祖國に過きす換言すれは是有形上の祖國なり此有形上の祖國の外更に無形上の祖國あることを知らさるへからす無形上の祖國とは宇內に冠絕せる所の天壤無窮の寶祚なり忠良勇武なる所の臣民なり軍紀嚴肅なる所の軍隊なり數十世紀に亙れる皇國の過去の歷史なり卽ち歷代臣民に慈恩を垂れ給へる列聖なり賢臣偉人の勳績なり名將勇士の功烈なり貞婦烈女の節操なり其の他美術家、著述家、碩學等凡て　皇國の進運を幇助し國光を發揚したるもの皆悉く無形上の祖國なり又無形上の祖國とは我忠勇無比なる軍人か國家を保護し國權を維持せんか爲驀へせし所の軍旗な

り即ち我國家なり大日本帝國なり吾人幸に此神聖なる皇國に生れ世々煦育の恩に浴す則ち豈其の原つく所を知らざるへけんや神代は邈たり今得て詳にすへからす然れとも謹て古傳を案するに太古宇宙未た生らさるの時大虛中に成りませる神の御名は天之御中主神次に高皇產靈神(神魯企命)神皇產靈神(神魯美命)此三柱の神(或は一神とも云ふ)は別天神にましまして宇宙諸曜を創造せられ元運の大法則を定められたりと傳ふ次に大地開闢の初め洲壤浮ひ漂へること譬へは海上の浮雲の根係る所なきかゝ如し時に天地の中に神生りませり國常立尊と號す亦別天神に座して人得て測り視るへからす其の後ち伊弉諾、伊弉冉の二尊天神の意を受け磐馭盧島に御降臨あるや斯の國土を固成し君臣輔弼の大義を開き夫婦唱和の大倫を定められ以て國家經綸の大道を明かにせらる　天祖天照皇大神嗣て高天原に御す明德八表に光被す　天孫瓊々杵尊に賜ふに三種の神器を以てせらる曰く鏡曰く玉曰く劍因て勅して曰く豐葦原の瑞穗の國は是吾子孫王たるへきの地實祚の隆なる當に天壤と窮りなかるへしと此間　天祖始めて穀を種へ蠶を養ふの道を開く民是に於てか衣食す大巳貴命、少名彦命始めて療病厭災の方を定む民是に於てか疾病災害を免る素戔嗚尊、五十猛尊山林を殖し材木を足らす民是に於てか其の生を養ひ其の居に安んす已にして　天孫諸神を率ゐて日向國高千穗嶺に至らせ給ふ武甕雷命、經津主命等をして殘賊强暴なる惡神を攘除せしめ豐葦原の中ッ國を平定せらる爾來天ッ日嗣世々神器を奉して以て萬姓に君臨し其の他は降りて臣民となり各其の職を分擔し其の業に精勵し忠良勇武以て　皇室を奉戴す是蓋し　皇國基を建つるの大端なり之より以降吾人の祖先は世々　皇國の恩澤に浴す而して其の恩澤の廣大無邊なる吾人は之に浴して其の誰に依て然るやを知らさるなり今や吾人は吾人の周圍に萬般の資源を發見することを得風雨を蔽ふ所の家屋、寒暑

を凌く所の衣服、吾人の生存の狀態を改良するに利用し得へき諸物は皆我　列聖竝に我祖先の創設又は改良したる工藝の結果なりと知るへし。

往時仁德天皇か民の富は卽ち朕の富なりと宣はれ又醍醐天皇か寒夜御衣を脱して窮民を想ひ給ひしより以來茲に二千有餘年吾人國民に無限の慈恩を垂れ給へり若し夫れ天災地變等あれは特に　皇室より下附せらる所の恩賜擧けて數ふへからす此の如くにして　皇室は常に吾人の休戚に注意し吾人の其の堵に安んし其の業を樂むや否やを憂慮せらる今や海内靜謐にして國民安んして其の野を耕し其の業を營むを得是皆皇國の賜ものなり萬一猶若干の人舊來に比すれは稍其の生計の困難を感するものあらんか是其の不德無能の致す所若くは世界人類の生存競爭上止むを得さるに出て決して皇國の罪にあらさるなり今や宇内の進運は決して國民の尸位素餐を許さす國民若し其の國威を發揚し其の獨立を確保せんと欲せは勢ひ勵精各其の業に服せさるへからす其の他　皇國は莫大なる陸海軍を養ふ是吾人の財産、生命、國民の名譽及國土の完全を保護する眞正の干城なり此軍人なからんか國家は忽ち外敵の入寇を受け吾人の田野は荒殘せられ吾人の工業は破壞せられ吾人の家屋は燒夷せられ吾人の母姉は凌辱せられ而して獰猛なる戰勝者の傲然として皇國の土地を僭奪するを見ん(近くは支那、印度、菲律賓等の事件を見よ)幸にして我忠勇なる軍人は常に此に在り絶えす危險なる他國の慾望に對し我國家を保護し外人をして我國體、國權、國利を尊重し敢て侮り侵ささらしむ　皇國か吾人の爲に盡せし所夫れ此の如し有形上、無形上　皇國は恰も我父母の如く無疆の恩惠を吾人に垂れ給へり吾人成長するの後は復た父母養育の必要を感せさるに至ることあり然れとも一日も　皇國を缺く能はす之を譬へは吾人國民は恰も草木の如し而して　皇國は大地の如し草木

は大地の水液を吸收して以て活き吾人は皇國の資源に賴りて以て生存す草木大地を離るれは卽ち枯る國民國家を失へは則ち滅亡流離す(猶太宗徒の如し)故に曰く國恩は山よりも高く海よりも深しと夫れ恩惠は報効を徵す鳥獸すら且恩を記す況や人に於てをや故に吾人は其の受けたる國恩を深く肺肝に銘し瞬時も之を忘るへからす夫れ父母又は他人の大恩を受け一朝之を忘却することあらは人之を何とか云はん然るに國恩は至大なり故に吾人は必ず之に報ゆるの大義を有す。

報國の心は又愛國の心に依て加はる吾人は生れなからにして我國を愛す換言すれは吾人は知らす識らす之を愛す吾人の生れたる所、吾人の成長したる所、吾人の幼時を經過せし所は吾人の爲には無限の快樂を感し言ふへからさるの眷戀あり我草蘆、我鄕里より施いて我府縣我日本全國に及ふ所の此愛情は天然自然的のものなり試みに遠く他邦

に旅行し若干歲月の間外國に生活せよ夢寐の間吾人の腦裡に映する所のものは悉く我祖國の風光のみならん然れとも此、有、形、上、寧ろ物質的の愛情は凡ての自然的感情と等しく稍劣等に屬するものなり之をして能く一の道德たらしむるには理義の參加を必要とす故に唯祖國を愛するのみを以て足れりとせす吾人は何故に之を愛せさるへからさるかを知らさるへからす祖國の愛せさるへからさるは啻に其の生れたる所なるか爲のみならす吾人若し唯其の生れたる所のみを以て祖國とせは時としては外國を以て我祖國となささるへからさる場合あらん(外國に於て生れたる我か同胞の如き)豈夫れ然らんや吾人の祖國は獨り大日本帝國あるのみ換言すれは我萬世一系の皇室の歷代君臨し給へる所、吾人の祖先か我皇室の稜威に藉り數十世紀の間辛苦して經營し其の鮮血を犧牲にし其の遺骨を埋めたる所、忠勇義烈の魂魄の彷徨する所換言すれは正氣の磅礴する所なり良い哉大橋訥庵

の言や曰く(天の覆ふ所、地の載する所、萬國森羅して華夏蠻狛分る何をか華夏と云ふ四時行はれ百物生す彝倫序あり、風俗醇つし、是を人の人と爲す何をか蠻狛と謂ふ(中略)君父を輕賤し貨利を崇重し纂弑相踵き爭奪絶へす是を人の物と爲す人の人と人の物と其尊卑妍媸の相懸かる亦彰然著明ならすや維れ我か神聖の域帝出の震位に據り乾元の精華を鍾め淳厚俗を成し忠武を道となし君臣の義猶父子の親の如し是を以て皇統一姓鴻基動かす之を萬國に求むるに未た斯の如き美にして且正なる者あらす)と是卽ち聖諭に苟も我日本國に生たるもの誰一人として盡忠報國の心を缺くものなき筈なりとの意を宣はれたる所以ならんか。

況して軍人たらん者は此心の固からては物の用に立ち得へしとも思はれす軍人にして報國の心堅固ならされは如何程技藝に熟し學術に長するも猶偶人にひとしかるへし其隊伍も整ひ節制も正くとも忠節を存せさる軍隊は事に臨みて烏合の衆に同かるへし。

技藝とは射擊、劍術、操砲、土工、操舟等手足を習はし器械に熟するを云ひ學術とは理數、地理、戰術、築城、造兵等の諸學術を云ふ偶人とは土偶木像なり隊伍は隊列部伍なり節制は運動、進止なり事に臨みてとは一旦緩急ありて孤城を守り又は優勢の敵と戰鬪するか如き非常の場合に遭遇するを云ふ烏合の衆とは烏の集合したるか如く忽ちにして散亂するものを云ふ。

私かに案するに古へは軍人の學術、技藝極めて單純なりし今や大に複雜となれり古への戰は主として腕力の戰なりしも今の戰は寧ろ精神の戰なり古への武器は刀槍劍戟に過きさりしも今や則ち器械の精巧を極む是を以て今日軍隊の敎育は錯雜にして且困難なり軍人は武器の使用に慣熟せさるへからす長途苦難の行軍に耐へさるへからす敏

捷整齊に運動し得さるへからす迅速正確に上官の命令を實行し得さるへからす之か爲には先つ體操を敎ふ是れ身體を矯捷にし固僻を去り武器の使用を容易にし氣力を鍛錬し自信力を增さしめんか爲なり

次に軍人は完全に武器の用法を知らさるへからす卽ち步、工兵は小銃、騎兵は刀槍、砲兵は火砲の使用に熟練するを要す是猶職工の其の器具の使用に慣熟するか如し啻に之か使用に熟するのみならす之を以て確實に敵を殪し之を潰亂せしむるを要す殊に銃劍術の使用に熟すること緊要なり是頑强なる敵は單に火力のみを以て擊攘する能はされはなり密集敎練を嚴正確實に行ふことは軍紀の維持上にも甚た必要なり其の他戰術上の要求に基き指揮官の指示せる地點に確實迅速に集合又は展開すること、上官の命令には絕對の服從を爲すこと、上官の意圖を了解すること、縱令上官の命令なきも全軍の爲機宜に適するの處置を取る所謂獨斷專行をなし得ること等皆長年月の閒困難なる敎育を要するものとす海軍及特科兵種に在りては以上の外猶種々なる要求あり卽ち海兵に在りては艦船の操縱器械の運用、騎兵砲兵に在りては騎乘、工兵に在りては築城、交通、爆破、輜重兵に在りては梱包積載等の如き決して單純簡易のものにあらす故に軍人たる者は日夜孜として此等技術の練磨熟達に努むるにあらされは未來の戰勝は得て期すへらさるなり殊に下士たる者は軍事敎育上將校の助敎として又兵卒の活模範として此等の學術技藝に熟達しあるへきのみならす往々將校を代理せさるへからさるか故に其の責たるや一層重大なり其の他下士は中隊なる家庭の慈母として能く下情に通し上下の意志の疏通を謀り以て軍隊の和諧一致を謀るへきものなるか故に其の品性に於ても決して將校に劣るへきものにあらす又將校に在りては其の研鑽すへき學術一にして足らす實戰の經驗は屢之を爲し得へからさるを以て或は野外に於ける演習に依り或は戰史又は圖上の研究に依り適當に

戰況を判斷し迅速に決心し之に應するの處置を研究する如き戰術的能力の必要なるは固より論なく一方に於ては亦最も數學に長せさるへからす是頭腦の明晰は萬人の死生を睹する戰爭行爲に必要なるのみならす軍用科學研究の爲にも亦極めて必要なれはなり地形、水路、地質學に通せさるへからす是地形は戰術上に至大の關係を有するものなれはなり理化學に通曉し殊に器械學に通せさるへからす是今日の軍用兵器は最も精巧を極むれはなり又土木學に通せさるへからす是築城工事の如きは國防上極めて祕密を要するのみならす其の施設は凡て戰術上の要求に伴はさるへからさるか故に之を普通の技師に委すへからされはなり其の他世界の歷史、地理は勿論法律、經濟、衞生等の事に至る迄軍事上所要の智識を有すると同時に亦外交、政略の事にも通曉しあらさるへからす是戰爭は國家の大事にして政略、外交と密接の關係を有すれはなり但し一將校にして悉く此等諸學術の蘊奥を極

むることは到底望むへからさるも少くも其の一學科に精通し而して洽ねく他の學科の大體に渉らさるへからす是今日軍人の業務は最も困難にして亦最も榮華なる所以なり然りと雖も此等技藝學術は未た以て軍人の具備すへき最重の技能資質となすに足らす之より猶貴重のものありて存す報國の心是なり、換言すれは學術、技藝は末なり忠君愛國の心は本なり軍人にして報國の心堅からされは如何にして國家の干城たる其の職分を盡すを得んや報國の心は軍人の精靈なり苟も報國の心を缺かんか如何程技藝に熟し學術に長するも猶精靈なき木像土偶の如く毫も實用をなさざるのみならす時としては利慾に迷ひ或は小節の信義に羈され却て國家の大害をなすことあるへし。

軍人一人に就て云ふときは概ね以上述へたるか如し其の他多數の馬を集合し一隊一團を編成したる軍隊に在りて縱令其の隊伍も整ひ其の進退運動も正しくとも各人盡忠報國の精神を缺くに於ては優勢

の敵と遭遇し又は頑强の敵を攻擊する等非常の場合に臨み忽ちに挫折散亂すること恰も群集せる鳥類に等しかるへし。

抑國家を保護し國權を維持するは兵力に在れは兵力の消長は是國運の盛衰なることを辨へ。

國家とは學理上より之を解釋すれは土地、人民(軍隊を含む)及主權の合體にして一言以て之を蔽へは則ち國なり國權とは國家の威烈權利を謂ふなり。

私かに案するに此聖諭の意は內憂外患に對し我國家を保護し國民をして永く太平の福を受けしめ又外國の侮を禦き國家の威權を失墜せさる爲には陸海軍の兵力を强盛にするより他に途なく此兵力盛なるときは國運益〻隆昌となり之に反し兵力萎靡振はさるときは國家は衰運に向ふものなりと宣ふにあらん此聖諭を會得する爲には先つ戰なるものは到底人世に免るへからさるものなることを了解せさるへからす熟〻天地間の事物を觀察するに諸般の現象戰にあらさるものなし然り星雲の互に衝突し雷鳴電閃するは是天上の戰なり風雨の驟かに至り波濤の夜驚き氾濫火山の激漲暴發するは是水火土風の戰なり綠葉葱蘢として互に日光を奪ひ蟠根錯柢の地積を爭ふは是草木の相鬪ふにあらすや鳥獸魚介昆蟲の相搏噬するは是禽獸の戰にあらすや而して人は又常に此等の動植物を食す此故に天地は一大戰場なり、佛人「佐理英兒」氏曰く(天壤間の現象は悉く動に基く彼の塊然として形をなし粲然として色をなし戛然として聲をなし目に觸れ耳に達するもの一として動に因らさるものなし)と宋の蘇軾又曰く(天の剛健にして屈せさる所以の者は其の動きて息まさるを以てなり惟其れ動きて息ます是を以て萬物雜然各其の職を得て亂れす其の光日月となり其の文星辰となり其の威雷霆となり其の澤雨露となる皆動に生するものなり天をして動くを知らさらしめは其の塊然たるもの將に腐壞

して自ら持する能はさらんとす)と動あれは必ず抗敵あり已に抗敵と云へは戰必す之に隨ふ人生に戰爭の避くへからさるは各人其の思想を異にするに出つ人心の同しからさるは其の面の如し一は顰蹙を以て愛すへしとなし一は之を以て惡むへしとなす一は白衣を唱へ一は黑衣を主張す是皆爭の原因なり加之人に慾情あるは免るへからさることにして人其の父兄を愛すること他人の父兄を愛するに優り人其の身を重んすること他人の身を重んするに優るは人情の自然なり是に於てか利害の衝突起る選擧の競爭、科學文學社會の分黨は一種の戰なり文武の軋轢、議會の波瀾は皆人の知る所而して往々眞正の鬪爭に變することあり加之人は絶えす自ら己れと戰へり道德、義務、情慾、怨恨は心中に於て常に相戰ふ而して縱令複雜なる思想の自ら起らさるときに在ても書を讀み或は物を觀て自ら心思を攪動するものの如し夫れ諸國は一個人の集團なり而して國民各其の人情、其の風俗、其の法律及其の宗教を異にす故に亦多少錯雜なる紛紜の起るは避くへからさる所なり此等紛爭を裁決するに平和の手段を以てするを得は大に幸なるも不幸にして殆んと實行すへからさるを如何せん戰の動機は古來時として帝王の大望心に出てたることあり時としては人心を他に移轉せんとする政治家の政略に出てたることあり又一國の人民無學不德、懶惰にして且懦弱なるに乘し他國輙ち之を攻擊して其の國を滅し其の人を奴隷とせることあり然れとも亦正義の戰あり例へは外患に對して其の民人及財產を防護するとき、侵害せられたる名譽權利を恢復するとき等是なり其の他自衞上已むを得す戰を挑まさるへからさるときあり碩學「孟德斯咎」曰く(社會上正當の防禦は時として他を攻擊するを要することあり茲に國あり日々强盛に赴く若し速に之を止めすんは我を害すること明白にして我滅亡を豫防するは唯彼と開戰するにある時の如き是なり)と故に開戰を遷延するは決して之を避く、

る所以にあらす却て敵人の利となること往々にして之あり孔子曰く文事ある者は必す武備ありと不動明王は手に劍を放たす基督經中にも國土を荒殘せる戰爭を載す是に由て之を觀れは戰の原因は自然に出て其の根源を深く吾人の天性中に有す此活世界に向ひて永久の平和を夢想するは恰も彼の大海に潮汐なく風浪なく活澹不動にして澹水たるを望むの類なり此希望をして成らしめは世界は忽ち疫疾の流行を見ん。

或ひと曰く戰は天意に反す佛經は殺生を戒む耶蘇基督の言に曰く劍を擊つ者は劍に死せんと然れとも此慈仁なる宗教上の教訓は曾に實際に行はれさるのみならす歐洲に於ては戰は新舊兩教の間及正邪兩教の間に起れり昔羅馬帝國の衰頽するや蠻人侵入して騷亂其の極に達せり「査理曼」大帝西方に起りて再ひ基督帝國を建てたりと雖も軍人の氣焰は却て昔日に倍蓰し僧正たる者其の法衣を脱して劍戟を把

るに至れり其の爭亂中古に至りて益甚しく遂に歐洲の大亂を惹起せり近世に及ひ歐洲諸國は野蠻なる人民を濟度するの目的を以て續々宣教師を弱邦に派す若干の紛紜は必す之と愚昧なる人民との間に起るを常とす是に於てか責罰すへき瀆神事件あり復仇すへき慘酷事件あり軍艦は派遣せられ軍隊は上陸す重大なる賠償を請求し聽かされは即ち其の國を滅す佛教の始めて我國に來るや爭亂は忽ち之と神教との間に起れり其の後僧侶は常に甲冑を裝して內亂に干與せることは歷史の明記する所なり此故に戰は假令ひ天意にあらすとするも少くも不德懶惰罪惡の徒跡を此地上に絕ち天下正に復するに至る迄の間は到底避くる能はさるか如し歐洲多數の識者は以爲らく天神は戰に干與し而して絕えす微笑を含みて其の變遷に注目するものの如しと。

或ひと又曰く戰は人道に反す戰は不正卑陋殘忍なり人の良心を變して慘酷となし遂に之をして禽獸に劣るに至らしむと然れとも世人は

其の必すしも然らさるを知れり夫れ戰は素と强硬行爲なり隨て慘酷の行爲あるや固よりなり然れとも戰は猶猛烈なる暴風雨の如し夫れ暴風雨の起るや漂忽震蕩樹を拔き家を覆へす而して其の止むや天地爽快日月明を加ふ戰も亦此の如し其の血を喋み屍を踏み戈を揮て相搏つに當りてや破殘殺戮人をして戰慄せしむ然れとも一旦已むに及んてや公明正大の氣、忠孝仁義廉耻の心油然として國民の間に生す此心此氣や昇平日久しく國家將に衰へんとする時は已に世人の腦裡を去りて竊かに戰の裡に寓す是故に慘酷の事を行ふものは悉く慘酷の人にあらす世上最も正直公正なる人は多くは軍人なり「ジョゼフ、ド、メーストル」曰く(予は平生軍人の良知を尊敬す予安そ剛直なる軍人を捨て、彼の奸佞陰狡なる文人を取らんや)と實に戰は軍隊及一般社會に數多の德義を傳播扶殖し以て其の衰頽を豫防す德義とは何そや勅諭に所謂忠節禮義武勇信義質素是なり詳言すれは忠君愛國信仰謙讓

從順慈仁果斷進取堅忍戒愼正直公德及廉直寡慾等の諸德なり然れとも軍人中に悉く此等の德義を具備せさる者あり是猶法律上の德義は悉く司法官に望むへからさる如く又宗教上の德義は悉く僧侶に期待すへからさるか如し加之人は其の知らさるものを誹議すること常なり論者は往々錦蓐の上に晏然溫臥して軍人を誹謗するを知る然れとも兵士の寒夜戈を枕として結氷せる河畔に徹夜するを思はさるなり史上有名なる軍人を觀るに其の德行以て世人の龜鑑となすへく以て後世の教訓となすへきもの枚擧に遑あらす又西哲の古諺に曰く(天才德義及名譽は猶嬋娟の色馥郁の香に富める植物の如し而して戰場の鮮血は之を培養するの肥料なり)と獨國「猛奇」(モルトケ)將軍の「ブルンチュリー」博士に與へたる書に曰く(永久の平和は畢竟南柯一場の夢に過きす而も美麗なるものにあらす戰は上帝か世界の秩序の爲に定めたる一關節なり人間の最高道德卽ち武勇忍耐義務心及殉國心は實に戰に於て發

揮せらる若し戰なくんは世界は忽ち唯物主義に墮落するならん)と。

或ひと曰く戰は人世の福利に反す戰は啻に不生產的なるのみならず却て破壞的なり戰は歲計國利民福を滅却す是償ふへからさるの災なりと是其の一を知りて未た其の二を知らさるの論のみ夫れ天下の事眼前に見はるるものあり否らさるものあり其の結果直接に生するものあり間接に來るものあり人若し眼前の結果のみを見て間接の結果に備へさる時は禍殃忽ちに到る戰は安寧を破り生產を滅し死喪及滅亡を跟隨す故に其の直接の結果たる甚た不祥なり然れとも戰は自衞の爲に必要なるのみならす社會の腐敗を豫防する爲にも亦必要なり蓋し昇平日久しき時は富饒を來たし富饒は柔弱及貪婪を生す世人は唯得ることを知り樂むことを望むのみ勇敢、堅忍、困苦、缺乏に耐ゆる等獻身殉國的の諸德は蕩然地を拂ふに至らん此時に當り再ひ人心を振作し國運を挽回せんには唯戰をなすの一法あるのみ「孫武子」曰く(之を

死地に陷れて而して後に生く)と佛人「佐理英兒」氏又曰く(戰は現在の小害を以て未來の大幸を買ふものなり戰は猶劇藥の如く瀕死の人民を振起して其の麻痺、腐敗、老衰の爲に將に死せんとするを救ふものなり)と獨人「ヘーグル」氏又曰く(戰は吾人の德義を修飾し且之を確實にす戰は昇平の爲に萎靡せる人民を振作し國家を鞏固にし各人種の氣力才能を試驗して其の優勝者に權力を附與して社會萬般の事物に活動、生氣、氣焰を與ふ)と實に國民若し愚昧、放縱、懶惰、無識なるときは戰必す敗れん萬一此の如くにして猶戰に勝つことあらんか吾人人類の墮落は底止する所を知らさるへし故に戰は改良進歩の要件なり墮落に流れんとする人民の劇藥なり小成に安んせんとする國民の鞭韃なり茲に國あり地已に大に富み已に裕かに而して隣國の之を刺激するものなきときは忽ち衰頽の兆を見はす即ち人は唯金銀を崇拜し有形上の快樂を貪り安逸の情增長して發憤熱中の心減少し人心怜悧圓

滑となりて廉耻硬直の風消滅し人は唯一時を僥倖し榮達を求むるに汲々として不朽の功、後世の名之を求むるを努めざるのみならず却て之を冷笑するに至る岌々乎として夫れ危き哉「孟軻」氏曰く(人では則ち法家拂士なく出ては則ち敵國外患なき者は國恒に亡ふ然して後に憂患に生きて安樂に死するを知る)と「佐理英兒」氏又曰く(天氣の靜穩なるは大風雨の後に在り百花の爛熳たるは嚴冬霜雪の後に在り人も亦此の如し戰に依て絶えず鞏强なる鍛錬を受くるにあらざれは寛悠なる休息を享くるを得す休息の久しきは亦人類の不幸なり)と次に人民財産の保護上に就きて論せん昇平久しきときは人民は唯其の財産を以て逸樂するを知るのみ貧困或は野心ある强隣に對して之を保護するを忘るるなり夫れ他國の制御を受けさる方法の爲には天下公衆の資産を蕩盡するも憾む所なし「ボーブナルグ」曰く(戰備を修むるは外國の奴隷となるに比すれは其の失費たる甚た僅少なり)と「佐理英兒」氏又曰く(世人は常に軍隊の消費する所の者のみを見る而して常に其の豫防する所の者を察せす國家の獨立は一の至寶なり縱令如何なる經費を要するも以て不廉となす能はさるの至寶なり)と然り兵器築城艦艇の爲に費す所の金額は實に莫大なり然も其の罪たるや全く近世科學の進歩に在り野蠻未開の時代に在りては戰も亦野蠻的なりしも工藝の時世に在りては戰も亦工藝的なり既に平世の爲に器械を發明す故に戰時の爲にも亦之を發明するは理の當然なり若し經費を增すを欲せす吾人の祖先の使用せる弓箭劍戟を執らんか然らは則ち亦獸皮を衣木實を食はさるへからす精巧なる器械を使用するには亦精密なる訓練を要するは理の睹易き所にあらすや加之今日の軍隊は錯雜巧妙なる器械に異ならす戰時克く之を運轉して過失なきか爲には平時の綿密なる訓練を必要とす故に上將校より下一卒に至る迄日々熱心に之か研究に從事し絶えす之に改良を加ふるを要す戰爭の開始は動も

すれは倏忽の間に起り第一衝突の勝敗は全戰役に影響すること甚大なり故に開戰に臨みて始めて兵を訓練するか如き愚を演するを得す必任義務の兵役法は此點に於て開然する所なきものとす一度も兵營に入らさる兵器の使用を知らさる實戰の豫行たる演習に出場したることなきものは眞の軍國の公民と謂ひ難し今や戰に當り單に勇氣のみを恃む能はす軍紀の何物たるを知るを要す兵器の使用に慣熟するを要す上官の意圖を了解し誤りなく之を實行するを要す又絶えす軍用科學を研究し築城、兵器、造船等の點に於て常に一歩他國に擢んするを要す戰は國の大事なり萬人の死生一國の存亡に關す決して僥倖を恃む能はす卓越せる軍人精神と共に進歩せる軍事上の智識を必要とす故に豫め編成演練教育したるものにあらされは實戰に際し勝を制すること難し其の他軍隊は國民の一大學校なり國民此學校内に於て忠義心公德心を養成し禮儀を守り規律を重んし早起に慣れ清潔を好

み奢侈を敵視し艱難に耐へ秩序を重んするの風習を造成し且之を一般社會に傳播す是豈不生産的と謂ふへけんや其の他史に徵するに大戰役後財政必すしも窮乏を告けす人口必すしも減少を見さるは東西共に見る所(日、獨)にして敗者と雖も亦往々有利の結果を見ることあり(清、佛)吾人萬一進歩の旋風中に眩惑し文明なる塑像を迷信し非軍國主義を信奉するに至らは實に國家の不幸にして狡焉たる外人の陰かに喜ふ所ならん幸にして天下具眼の士は能く此理を會得し財政之を許すに隨ひ漸次に陸海軍備を擴張す國民皆兵の實を擧くるならん。

或ひと曰く戰は天然に反す天の人類に附與せる第一の性質は自衛の性質なり然るに戰は人生を戕害す故に戰は天然に反すと夫れ然り然りと雖も此自衛の性質は人の諸性質中至美至善のものにあらす吾人若し此自衛の性質のみに從はんか人生は實に卑陋無耻のものとならん吾兒將に水に溺れんとするも趨りて之を救はす人將に吾か父を殺さ

んとするも恬として之に赴かす曰く吾か身危しと恰も彼の蝸牛の如く自己と呼へる一の殼中に閉蟄し直接に自己に關係なきものに對しては著しく冷淡、無情とならん蓋し自衛を以て無上の性質となせはなり戰場に於て恐怖悲慘の事あるは眞なり狼藉たる死屍、淋漓たる鮮血、痛苦絶望の叫聲見るに隨ひ聞くに隨ひ悽絶慘絶の事にあらさるなし戰後に於ても手足を失ひたる老人を見父なく夫なき孤兒寡婦を見慰藉し難き死喪を目擊する時は何人と雖も心を動かさざるものなし然りと雖も貞、婦、烈、女の其の最愛の兒、其の最愛の夫を失ふも忠義の爲其の悲嘆を抑制するものあれは吾人は中心より之を贊美感嘆するにあらすや楠公の夫人、瓜生保の母千歳の下猶人をして感憤興起せしむ豈無情の人ならんや豈喪心の人ならんや其の他人は天然に名譽を愛す諺に曰く人は一代名は末代と又曰く虎は死して皮を留め人は死して名を留むと孔子曰く君子は世を沒へて名稱せられさるを疾むと人は

天然に義を愛す孟子曰く(生も亦我欲する所義も亦我欲する所なり二の者兼ぬるを得へからすんは生を舍てて義を取るものなり獨り賢者是心あるにあらす人皆之あり賢者は能く喪ふなきのみ)と人は天然に軍事を好む砲聲の殷々たる、軍樂の洋々たる、軍馬の嘶鳴、地雷の爆發、同色の衣袴を著け同一の指揮の下に同一軍旗の下に齊列せる兵士、人之を見之を聞く時は覺えす一種の感情を生す此感情たる至强至烈にして疲勞、苦痛、危險一も之を抑制するに足らす而して將士は皇國の爲陛下の爲なる靈語に依て奮起し發憤し喜んで其の生命を捨つ人若し此感情なからんか是戒愼狡黠なる一の獸類のみ人は利即ち計算と呼へる特性を重んするならん而して道德の最美なる者即ち忠節を存せさるに至るへし人は生くることを知る而して死することを知らさるへし其の他世に外觀無益なるか如き美事あり義烈の行爲是なり之なけれは人生は決して偉大なる能はす楠公は湊川に戰死せり赤穗四十七

士は先君の仇を復したり是毫も當時に益なきか如し然れとも之か爲日本全國の義氣を振起せること夫れ幾何そや吾人若し常に計算的に事をなし利を之事とせは忠勇、義烈、獻身殉國的の行爲は跡を絶つに至らん是國家の爲危險の大なるものなり此、故、に、戰、は、決、し、て、人、性、に、反、せ、す、實に好戰の心は早く已に兒童の心中に瀰漫す兒童の動作は快活にして少らくも靜止せす是卽ち戰の影像なり少者壯者は概ね戰を熱望し而して其の多數は軍人たるを希望するものなり老成沈著なる大人も戰役の起るを聞けは心中に一片愉快の念を生するか如し此念たるや新奇異常の事を喜ふ所の固有の性情より來るなり老、人、も、亦、常、に、其、の、老、衰、事、に、堪、へ、さ、る、を、悲、み、而、し、て、彼、の、軍、隊、の、翩、飜、た、る、軍、旗、の、下、に、陸、續、出、征、す、る、を、見、て、之、を、羨、望、し、之、を、目、送、す、る、に、あ、ら、す、や、或ひと曰く戰、は、正、道、に、反、す、戰は强者の力を掩護し弱者の權利を沒却すと是亦未た眞理を究めさるの論なり何となれは力は權利の保護者

なり力なくんは權利は空想たるに過きさらん力なるものは純然有形上のもののみにあらさるなり力は國民の有形上の實力と共に無形上の氣力を代表す卽ち兵士の員數及艦船火砲の威力と共に國民の品性、才智、德義を代表す故に力は人生に必須缺くへからさる所のものなり戰の權利は實に此力の權利より生す是故に戰の權利は決して正道に反せす良き哉「パスカル」の言や曰く(力若し正義を缺かんか暴となる正義若し力を缺かんか則ち威なし故に力と正義とは決して離隔すへからす强者は必す正しく正者は必す强からさるへからす)と實に國民は正義の爲に戰を交へさるへからさるの時あり卽ち其の國家を保護し又は國權を維持せんとする時是なり此の如き戰は神聖なり其の結果の慘憺たるに關せす此の如き戰は偉大美麗なり皇國の人民擧つて一體となり忠節の爲には死を鴻毛の輕きに比す豈偉と謂はさるへけんや豈美と謂はさるへけんや此の如き戰は昔「北條時宗」か非常の英斷を

以て元寇を掃攘する爲行ひたるもの、近くは日清、日露、日獨の諸戰役の如き是なり今後と雖も若し我國土を侵害し我國威を侮辱するか如き國あらは我六千萬の同胞は之に向て劍を拔くに躊躇せさるへし。

或ひと曰く戰は進歩に反す戰は文明の途を塞き野蠻の門を開くと是亦然らさるへし戰は大體上より觀察すれは文明を助くるか如し史を閲するに諸國を建立せるものは戰なり戰は文明國の其の盛大の外裝內に隱匿せる文弱を摘發し奢侈を掃攘し其の氣力を振作す又未開の國に文明を輸入し其の制度を改良し其の人民を幸福ならしむ戰は交通の道を開き貿易の端を發し秩序及組織の原則を實行せしむ蓋し秩序及組織は戰に缺くへからさるものにして啻に戰爭中のみならす平時に於ても亦極めて必要なるものなり其の他文明を保護するものは武力なり蓋し文明たるもの若し常に壓迫脅威を受けんか安そ其の進歩發達を望むへけん是故に戰は世界を野蠻時代に復せしむるものに

あらす却て其の進路に當る所の諸障碍を排除し以て文明の途を開くものなり夫れ個人の一生は永久鬪爭なり人若し鬪爭に勝を制せんと欲せは强健ならさるへからす試みに名を青史に列したる人を看よ皆鬪爭せる人にあらすや軍人、政治家或は學士は辛辣なる試驗を經過せり數多の競爭に克勝し危險なる障碍を超越し而して其の堅忍不拔の勇氣と熱心精勵とに依て遂に其の命運をして己れに向て微笑せしめたるものなり國民の一生も亦個人の一生に異ならす絶えす猛烈なる攻擊精神を以て其の進路に横はる所の諸障碍を排除せさるへからさるなり。

是に由て之を觀れは戰なるものは到底人生に避くへからす、之を避けんと欲せは先つ之を準備せさるへからす兵力强盛なる國民は敵國をして畏敬せしむ之に反し兵備を怠る國民は忽ち外人の侮辱を招く決して戰を避くる所以にあらす般鑑遠からす近く東洋諸國(皇國を除く)

に在り是卽ち　聖諭に國家を保護し國權を維持するは兵力にあれは兵力の消長は是國運の盛衰なることを辨へよと宣はれたる所以ならんか。

世論に惑はす政治に拘らす。

私かに案するに世間千萬の行爲斯の忠勇義烈の行爲より神聖なるはなく世間千萬の精神斯の愛國尙武の精神より高尙なるはなし然るに廣漠たる全世界の中には又此愛國の主義に反對の說をなすものあり今や我大八洲の臣民一人として忠君報國の心を缺くものなしと雖も將來輕躁浮薄の徒歐米學派の糟粕を嘗め其の利害を口にするものなきを保し難し故に一言以て其の妄を辨し置かさるへからす實に歐洲諸國に於ては往々左の如き言論を爲すの徒あり曰く(吾人か生れたる此蕞爾たる小邦予に於て何かあらん我國の過去現在及其の後來の運命予に於て何かあらん予は國家なるものあるを知らす世界は廣し萬國は多し何そ我國人と他國人とを區別するの必要あらんや吾人の國家は卽ち全世界なり吾人の同國人とは卽ち世界の凡ての人の謂なり吾人の愛する所は獨り絕對的博愛なり吾人の願ふ所は世界の人士たるに在り)と此博愛心を誇張し愛國心を破碎せんとする所の學派を名つけて兼愛主義或は世界主義(歐語「コスモポリスム」)と云ふ佛國の學者「亞爾白爾壽」氏曰く(此の如くして吾人を愚弄欺騙せんとする所のもの竝に此人道に惑溺する所の輩は危險なる人物なり眞の國家の敵なり此學派の基く所の原則たる四海の人兄弟なるを以て人種を論せす國籍を問はす同一に之を愛せさるへからすと云ふに在り此輩の說たる國權なく國境なく諸國を合して一家とするに在り此學說たる外觀甚た美なり世界若し眞に一致和合するを得は之に過きたる美觀なかるへし然れとも到底是一の夢想に過きす而も甚た實際に遠き一の夢想なり大地は其の表面に棲息する人類の能く和合輯睦する爲には稍廣

きに失す數多の人種ありて之を分領せり而して此各人種は其の風俗同しからす思想同しからす言語同しからす宗教同しからす文字同しからす之をして能く敵愾心を捨て感情を一致せしめ世界的の同情を起さしむること甚た難し試みに同町村の人民又は同一系の宗族を見よ彼等は同一の國土に生活し同一の土地を耕す一は其の相互の間に日々の關係を有し一は其の血族たるより猶之より密接なる連繫を有す然るに此同村同族の人は果して能く常に完全なる輯睦を維持するや一の爭論たも其の間に生することなきや己れの利益を犧牲として他人の利益のみを考ふるものありや時としては他人の財産を破壞して己れの財産を扶殖せんとする者あり其の極度に至れは他人の失敗をも喜ふものあり同地に生れ同國に生活し多少教育を受けたるものにして猶此の如きものあり如何にして此廣大なる土地の表面に棲息する所の人類をして悉く和合輯睦せしむるを得んや如何にして愛國

心に換ふるに博愛心を以てせしむるを得んや博愛なる語は廣義を有す之を解釋するもの動もすれは則ち迷ふ又愛情には某程限あり然るに吾人の國家は已に大なり我國人は已に多し吾人は之を愛するに於て猶足らさるを覺ふ安そ同一の程度に之を他國人に及はすを得んや)と故に同國人を愛すること外國人を愛するに優るは自然のことなり吾人は先つ吾人の家族吾人の鄕里を愛せさるへからす而して最も我大日本帝國を愛せさるへからす何となれは吾人は日本人なれはなり而して成し得れは其の餘愛を他邦人に及ほすは希望すへきことなるも唯其の本末を忘れさるを要す我同胞たる日本臣民は世界に誇るへき齊一の步武を有す吾人は開闢以來唯一の　皇室を戴けり人種を同うし、言語、文字を同うし政府、法律、名譽、艱難を同うし同一の歷史、同一の希望を有す然るに外國人は此の如くならさるなり是同國人と他邦人との間に明亮なる區別を立つへき所以なりとす「亞爾白爾壽」氏又曰く

(吾人若し博愛心を以て愛國心の上に置き外人の爲にすること猶我國人の爲にするか如くすると假定せよ此の如くするものは恐らくは我國人のみならん外國人は決して此の如くせざるなり何となれは其の貪慾其の野心は報恩心よりも一層強けれはなり而して我國は漸次衰弱し過度の公益の爲に盡瘁せるか爲に國力を消盡し終には世人の輕侮を受くるに到るや必せり而して一朝隣強と開戰することあらんか博愛の空想家は叫ふならん曰く『戰は惡德なり兵は凶器なり人民間の戰は恰も兄弟の鬪に等し汝國人よ我寛量大度の模範を示せよ汝の敵に握手せよ他人の血を流す勿れ凶器を執る勿れ』と嗚呼實に寛洪の思想なる哉唯其の空想なるを如何せん唯其の極めて危險恐るへき空想なるを如何せん世人萬一之を信し之を實行するときは國家は忽ち滅亡せん卽ち此大度寛量の犧牲たる我國は遠からすして外敵の侵入を受け其の分割する所となり世界の地圖上に其の痕跡たも留めさるに至らん故に此學說を傳播し之を實行するを急くへからす爾他諸强國の先つ之を採用するの日を待つを以て賢なりとす彼等か野心侵略の政略を捨て力の時代逝きて正義及權利の時代に移り被壓者は世界の同情を得弱者は尊敬愛重せられ縱令其の懦弱なるか爲に弱きにもせよ强者の侮蔑を受けさるの時世を待て而して後に此學說を行ふ敢て遲しとせさるなり此の如くにして吾人は始めて他の國人と兄弟の交をなすを得へく彼等と同一の思想同一の感情同一の利害同一の希望の內に生活するを得へし然るに此極樂時代の此活世界に來たること あるへきや否やは甚た疑し恐らくは永世望むへからさることならん故に吾人の愛情を只管國家に傾注すへし是吾人の爲には實に死活問題なれはなり)と博愛自由平等を以て立國の三尊とする佛國學者の說く所今や已に此の如し蓋し佛人は今を距ること百年以前盛に此等の學說を唱道し誤て以て天下の眞理となせり然れとも眞理なるものは

理化科學に於けると等しく數多の實驗より抽出したるものにあらざれは眞正のものにあらざるなり佛人は自由平等々を名として數多の罪惡を行ひ拭ふへからざるの汚點を史上に遺したり而して其の結果として殆んと其の國の獨立を危うし全世界に示すに學理と實際とは到底一致するものに非さることを以てしたるに過きす換言すれは其の同胞の鮮血を犧牲として他國の爲に無益の實驗を行ひたるに外ならさるなり然らは愛國心の爲に吾人の心中より全く外人に對する愛憐慈悲の心を驅逐して可なるや曰く否是此謂にあらざるなり吾人は常に我皇室の萬國々民に對する至仁の御心を忘れさるを要す是吾人の大義の一なり先帝の御製に曰く(國の爲あたなす仇は碎くともいつくしむへきことな忘れそ)と故に吾人は人類の不幸又は災厄を見て之に同情を表するを要す其の國籍の如何を問はさるなり帝國か夙に赤十字同盟に加入したるは之か爲なり日清、日露戰役間若くは明治三十

三年北清事變近くは青島戰に際し敵の傷者を療養し其の捕虜を優待したるも之か爲なり博愛の眞意は此處に在て存す故に外人に對しては成し得る限り懇篤慈愛なるへし成し得る限り之を優遇欵待すへし是等しく人の子なれはなり是賓客なれはなり要は之か爲に愛國心を犧牲にすへからすと云ふのみ換言すれは文明又は博愛等の名に眩惑して我神洲固有の愛國心を銷磨すへからす此の如くして博愛は決して愛國心と相戻らさるなり然り博愛主義は某範圍内に於て愛國主義と併立して世に行はるるを得へし佛人「ルイブラン」巧に之を說明して曰く(愛國主義と博愛主義とは若し互に撲滅せさるに於ては全く和合併立するを得へし例へは人は祖國を愛す之か爲に其の家族を愛するを妨けさるなり人は世界の人を愛す之か爲に其の國家を愛するを妨けさるなり)と其の他軍隊に在りては上官と部下との間に於て絕對の服從を要求す是外觀自由に反するか如し然れとも後文更に詳說する

如く此にあらされは以て敵兵を克服し國家を保護すること能はす卽ち國家の獨立尊榮なる大なる自由を得んか爲に小なる自由を棄つるに外ならす又此天地の間何くに求めて純然たる平等なるものありや卑近の比喩を以て之を說かんに木に喬木あり灌木あり大小高低參差として始めて天地の美觀をなす今若し平等を求めて之か高きを剪り之か大なるものを削らんか則ち天然の美安くにかある又人には妍醜あり肥瘠あり今若し他人の妻の美貌にして己れの妻の醜なるを見て容貌の平等を主張するものあらは如何天下の人之を笑はさるものあらんや是故に此天地間には絕對の自由もなく又絕對の平等もなし是天理なり然るに奇なる哉此世界の內には往々其の國家の設立したる政府に服せさる逆徒あり甚しきに至りては如何なる法律にも服從するを肯せさる狂兒あり又己れ若くは己れの祖先は一も勤勞せすして他人及他人の祖先の辛苦して得たる資產を橫奪せんとする主義者あり終りに自己の利益の爲に百般の手段を設けて社會の安寧秩序を破壞せんとする蠹賊あり自由平等博愛等を名として罪惡を行ふ所の狡兒あり此等頑迷有害なる學說は往々文明の事物と共に外國より輸入し來り之か爲に世人を惑はし世論を惹起することなきを保せすと雖も國家の安危を双肩に擔ふ所の軍人は決して此等の邪說空論に惑はされさること必要なり　今上陛下の御聖諭に思索の選を愼みと宣はせられたるは亦此御趣旨に外ならさるへきか殊に政治に干涉せさること緊要なり是政治には時に汚隆あり巧拙あり軍人にして若し一々之に關係するときは爭亂續出人民塗炭の苦を受くへけれはなり波蘭土の滅亡、支那の紛亂皆之か般鑑たり現に先年の巴爾幹半島の戰亂に於ても土耳古軍の連戰連敗せる主なる原因は其の軍人の腐敗せるに在り是より先き政黨は軍隊を利用して其の勢力を擴張するを謀り隨て之か反對黨たる將校の團結を生せり此の如き政治熱は土軍將校を

して其の職務を怠り徒らに酒店に集合して内閣改造、議會解散等の空論に日を送らしむるに至り動員の計畫、兵器の改良、國防工事の施設の如き重要なる問題は土國陸海軍には全く廢物となれり此の如くなるを以て數多の土軍の陣地は毫も抵抗を試みすして放棄せられ五十名の將校は怯懦の罪を以て死刑に處せられたるも尚其の戰況を挽回する能はさりき之に反し普魯西國卽ち現時の獨逸帝國の如きは其の初め「ウイルヘルム」大帝の初年に當り大に軍備を擴張して國運を挽回せんとせしか輿論は常に之に反對せり然るに當時「ビスマルク」「モルトケ」「ローン」等の名臣ありて此等の愚論を排し再三議會を解散して軍備擴張を實行せり當時國民の不平は其の極度に達せしも「ビスマルク」は斷乎として語て曰く(普國は武力を養はさるへからす我國境は堅固なる國家の境界ならさるへからす今日の事多數者の演說議論若くは下院の投票等に依て決すへきにあらす唯血と鐵とに依るへきのみ)と此

の如くにして普國は千八百六十四年丁抹と戰て之に克ち同六十六年墺國と戰て復た之に勝ち同七十、七十一年大に佛國を破りて遂に獨逸帝國を建設せり今や獨國は我に聽かす世界を敵とし四面楚歌の裡にありと雖も戰捷攻取未た容易に屈服するの色なし其の準備の周到なる亦多とすへきものあり是に由て之を觀れは軍人の政治に關係するは害ありて益なく又輿論なるものは常に必すしも正當ならさるものたるを知るへし故に軍人たるものは凡俗なる政界以外に超然卓立して高尙無比なる己れか本分卽ち忠節を守ること緊要なり其の他我憲法は一見信教の自由を許されたるか如きも「安寧秩序を妨けす及日本臣民たるの義務に背かさる限りに於て」なる範圍を定められあり故に軍人たるものは宗教にして苟も安寧秩序に害あり殊に日本臣民たるの義務に背反するか如き疑あるものは之を信奉せさるを要す況や吾人軍人は唯一の經典たる本　勅諭を有するに於てをや。

我國明治十年前後に於ては文武の功臣多くは政治上の意見を異にし政治の議論を鬪はし或は自由平等の說を唱へ或は國權宣揚の論を主張し或は君側の奸を掃ふを名とし遂には　皇師に抗するに至りし者あり之を小にしては又往々宇內の事理を解せす漫りに外國の貴賓又は使節を害し或は其の學識の狹隘なるより誤て國家有用の人材を戕し之か爲に國家に及はせる所の害毒擧けて數ふへからさるものあり此等の人々は多くは國家の功臣若くは多少學識敎育ありて報國の心厚かりしか如きも一時の世論に惑ひ或は政治に拘はり遂に忠君の途を踏み誤り其の節操を破り賊名を負ふに至りたるものとす故に　聖諭に於て嚴に之を戒め給へるなるへし。

只々一途に己か本分の忠節を守り義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ其操を破りて不覺を取り汚名を受くるなかれ。

義とは後文　聖諭にある如く己れか分を盡すを云ふ鴻毛は鴻鵠の羽毛にして最も輕きものなり覺悟は決心なり不覺は不決心なる失態なり。

私かに案するに天地の間至大至剛物能く之を屈することなく富貴も淫する能はす貧賤も移す能はす威武も枉くる能はす千歲の下凜々として生氣あるものは夫れ唯忠誠の氣か其の磅礴として物に觸るるに當りては山嶽も其の高きを失ひ海洋も其の深きを失ひ勇者も其の氣を失ひ智者も其の謀を失ふ天地を究め萬世に亙り亂臣賊子の心膽を寒からしむるものあり玆に人あり炎々たる猛火を冒し人を將に燒死せんとするに救ひ或は怒濤激浪を顧みす人の將に溺れんとするを拯ふものあらは世間擧つて之を感嘆讚美するにあらすや是其の己れを忘れて人の急に赴けはなり此の性行たるや人性の至美至善にして隨て人を感動すること最も深し然るに此の如き獻身的行爲は軍人

に於て最も多し是軍人なるものは彈丸雨飛の間に於て上下一致生死を同くし危險を共にするものなれはなり故に身を以て上官を掩ひ敵前に斃れたる將校あり(佐藤繼信の如き)上官の馬の傷つきたるを見て己れの馬を授け自身は徒步して敵を拒きたる將校(小山田高家の如き)兵卒(淺川中隊長の從卒木村源松の如き)あり上官に代りて戰死せる將士(村上義光、武藏坊辨慶の如き)あり其の他或は危險を冒して戰友を救ひ或は自隊を犧牲として全軍を救ふ等數へ來れは枚擧に遑あらす此等の行爲は凡て偉大美麗なり千載の美談として其の芳名は長く竹帛に垂れん然るに若し此等の行爲單に其の戰友其の上官の爲のみにあらすして　皇室の爲國家の爲にせは如何卽ち一層偉大美麗なるものあらん然り死に至る迄吹奏を止めさりし木口(小平)喇叭手の如き敵の重圍を犯し萬死を賭して使命を全うせる谷村伍長の如き銃火の雨注を冒し敵の城門を爆破せる工兵下士卒の如き數倍の敵に對して孤城を嬰守し死生を冷笑せる藤肥州の如き敵火を冒し怒濤を排し敵の港口を閉塞せる廣瀨中佐杉野兵曹長の如き死に瀕して　東宮殿下の誕辰を忘れさる橘中佐の如き殊に南風已に競はさるを知りしも屈せす一族を擧けて王事に殉したる楠公の如きは其の忠誠日月と光を爭ふと謂ふも敢て不可ならす最近戰役に於ても我大日本帝國の將士は苦戰奮鬪其の將に斃れんとするや皆　天皇陛下の萬歲を唱へたり此時に當てや天地も其の誠忠に感し鬼神も其の壯烈に泣けり此等の行爲は單に其の上官の殊遇に感し又は其の戰友の急を救ふか爲にあらす實に皇室國家に對する忠節心より來るものとす此忠勇の精神たるや我祖先の遺傳にして我國民獨特の長所たり所謂大和魂なるもの是なり、本居氏の歌に曰く(敷島の大和心を人問はは朝日に匂ふ山櫻花)と是何をか意味せる夫れ櫻は　皇國唯一の花なり其の爛熳として開き暉々たる朝陽に映するや其の美觀得て言ふへからす以て我軍人精神

の壯麗優美なるに比するなり而して其の一旦暴風雨に遇ふや繽紛として一齊に飛散し亦後先なし恰も我軍人の敵に臨みて進を爭ひ死を視る歸するか如きに似たり宜なる哉古來櫻花を以て武士に比するや忠誠勇武は實に大和民族の天性なり然るに千萬人中時として怯懦なる者なきにあらす現に赤穗の士流中に大野九郎兵衞の如きあり又彼の明治二十七八年戰役間二三の軍人怯懦の罪を以て本國に送還せられたるものあり然るに其の故郷に歸るや郷人親戚之と齒するを耻ち又之に米麥を賣るを肯せさりしと云ふ此の如きは啻に最大の耻辱なるのみならす父祖を辱かしめ家名を汚し其の醜名拭ふに由なし故に

聖諭に於て深く之を戒め給へるならん。

或ひと問ふて曰く國難に當りて生命を鴻毛の輕きに比す予れ命を聽けり平時は如何にせは以て忠節と云ふへきや曰く他なし此心を以て軍紀を守り職務に勉勵せは可ならん益を請ふ曰く父母に孝なれ我國

は古來忠孝を重んす未た父母に不孝にして君に忠なるものあるを聞かす故に曰く忠臣は孝子の門に出つと是故に平時は身を慎み行を正しくし熱心精勵職務に勉勵し以て父母の心を安んし家名を辱かしめさることを圖るへし是卽ち皇室國家に忠なる所以の一端なり敎育勅語に宣はく(我か臣民克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは此れ我か國體の精華にして敎育の淵源亦實に此に存す)と。

一、軍人は禮儀を正くすへし。

禮儀とは敬禮容儀なり。

私かに案するに人の人たる所以の者は禮儀あるか爲なり人にして禮儀なくんは殆んと禽獸に近し禮記に曰く鸚鵡能く言へとも飛鳥を離れす猩々能く言へとも禽獸を離れす今人にして禮なくんは能く言ふと雖も亦禽獸の心ならさらんやと蓋し個人にして禮なけれは則ち爭

ふ一家にして禮なければ則ち齊はす公衆にして禮なければ則ち騷亂紛擾す故に人は一日も禮儀なくんはあるへからす況や秩序階級を重んし一般社會の儀表たるへき軍人に於てをや。

凡軍人には上元帥より下一卒に至るまて其間に官職の階級ありて統屬するのみならす同列同級とても停年に新舊あれは新任の者は舊任のものに服從すへきものそ下級のものは上官の命を承ること實は直に朕か命を承る義なりと心得よ。

官とは官等卽ち大將、中佐、少尉、軍曹等を云ひ職とは職務卽ち師團長、聯隊長、中隊長、內務班長等を云ふ統屬は統率、隷屬なり停年とは任官の經過年月日數なり。

私かに案するに軍紀は軍隊成立の大本にして軍隊は常に軍紀の振作を要するは皆人の知る所なり然るに軍紀は各人法規を恪守し上官の

命令に服從するを以て基礎となす殊に服從は軍紀の維持上最も必要なり是故に將校と下士卒とを問はす時と所とを論せす上官と部下との間に於て絶對に之を勵行し慣習遂に其の性を成すに至らしむるを要す萬一部下にして上官の命令を遵奉せす或は遲疑逡巡其の可否を云々するか如きことあらんか其の害たるや實に測るへからすして往往全軍の覆滅を來たすことあり佛人「亞爾白爾壽」氏曰く(軍隊に於て最惡の禍殃は言論の自由なり萬一各人命令の可否を討論し首長は一々其の士卒の意見を聽取するものとせは部隊の統一及指揮官の責任なる者絶無とならん今茲に十萬の一軍あり各人其の意見を鬪はしたる後にあらされは其の上官の命令に服從せさるものありと假定せよ其の紛擾如何なるへき而して敵は直に殺到して此議論家の一群を撲滅するならん)と元來軍事上の凡ての編制の目的は衆力を集結して之を一の成果を得るに使用するに在り此目的を達せんには各人其の階級

を逐ひ全力の使用者に服從するにあらされは能はす是故に軍隊に於ける服從は全軍の爲なり國家の爲なり其の趣旨たるや高尚偉大なり決して彼の偏狹頑冥者流の想像する如き無氣力奴隷的のものにあらさるなり換言すれは軍隊に於ける服從は決して世間に於ける屈從又は盲從と同しからす神聖なる必要より來るものなり實際に於ては上官は　天皇陛下の大權の行使者に外ならす上官の命令に服從するは即ち陛下の命令に服從するに等し其の如何に關はらす軍人は必す上官の命令に服從せさるへからす何となれは　天皇陛下は之を命し給ひしを以てなり。

其の他服從は部下の信頼心を必要とす此信頼心は軍隊に極めて必要なるものにして之なけれは戰勝は得て期すへからす部下は命令の理由を知るの必要なし唯其の上官の學識、經驗及其の武勇に信頼し確實に其の命令を實行すれは足れり實に部下の見る所は戰場又は事物の一端に過きすして其の全般を判斷する能はさるのみならす部下は之を判斷するの資格もなく又其の地位に在らす之に反し上官は周到なる熟慮に基き又は多年の經驗に頼り全般の狀況を達觀して至當の計畫を立て之に依て命令を下すものなるか故に部下は一意之に信頼し全力を集結して之か實施に努力すること必要なり上官も亦努めて其の計畫を愼重にし而して一たひ決心するや堅忍以て之を實行し必す成果を收むるを期し部下をして上官は決して己れを徒死せしめさるものなりとの觀念を抱かしむるを要す是即ち戰勝を得るの道なりとす。

己か隷屬する所にあらすとも上級の者は勿論停年の己より舊きものに對しては總へて敬禮を盡すへし。

私かに案するに服從は單に上官と部下との間のみならす其の他軍人一般に其の階級及新古の順序に從ひて之を守り恭敬辭讓以て全軍の

秩序をして整然たらしめさるへからす抑も服從は上に述へたる信頼心の外誠實なる尊上心と恭順なる敬長心とに依り且之を貫くに崇高なる忠節を以てし衷心より出てて形體に現はれ以て軍紀の森嚴を養はさるへからす單に上官の監視處罰を恐れて之をなすか如き外觀上の服從は恰も彼の惡人か憲兵警吏の捕捉を恐れて盜をなささると一般毫も價値なきなり善人の善をなすは賞を得んか爲にあらす其の惡をなささるは罰を恐るるか爲にあらす人の人たる道を盡すのみ軍人の法規を恪守し命令に服從する亦此の如くならさるへからす敬長の心とは長者を敬ふの心にして之を見はすに上官に對する言語擧動を以てす古人の所謂長者の爲に枝を折るなる者是なり故に下級の者は其の兵種と其の所屬隊とを問はす凡て上級者を敬せさるへからす又時と所とを問はす其の現在と不在とを論せす勤務閒と勤務外と現役と豫後備役とに關はらす之を敬せさるへからす而して此心を現はす

には其の正確嚴格なる敬禮を以てす是故に敬禮は軍紀の表彰なり尙此外形上の態度の外部下は絶對的に上官の私德又は行爲を誹謗せさるを要す實に上官は必すしも純然神聖なるものにあらす時としては缺點を有することあらん然れとも之を判斷するは部下の任にあらさるなり何となれは之を攻擊するときは上官の人格を損し隨て其の威權を減し遂に軍紀を動搖せしむるに到れはなり故に萬一上官の人格にして尊敬の價なきか如きものあるも其の服行する所の任務に對し其の有する所の位階に對し之を敬せすんはあるへからす尊上心とは何そ上官の勳功又は人格に對し衷心より景慕欽仰するの心なり世間往々天爵人爵の解釋を誤解し有位有階者は皆人爵のみを有するか如く思惟する者あるも是誤てり人間崇高の德義卽ち天爵は有德の人皆之を有す而して比較的有位有階者に多し殊に將校及下士は各其の價値に依り其の位置を得たるものなり將校中最も高き階級を有するも

のは最も智能ある人なり最も功勞ある人なり概して最も有德なる人なり彼等は國家皇室の爲に戰へり彼等は戰場に其の血を濺きたり而して已に長歲月開皇國に忠節を勵みたる後猶蹇々として王事に勤勞し一朝事あれは國家の爲に殉せんことを覺悟しつつあるにあらすや一方に於ては青年將校は未た赫々たる勳功を見はさすと雖も是未た其の機會に遭遇せさるのみ加之此等の人々は困難なる試驗及演習を經て始めて此階級を獲得せるは人の知る所なり此試驗此演習は卽ち其の才智と其の技倆とを證するものなり下士に至りては則ち空名を求めす虛榮を貪らす質實淳朴一身を以て軍國に供し將校の爲必須の補助官たり如何そ等しく之を尊はさるへき中隊なる家庭の慈母として親しく兵卒を敎育し之を軍紀に慣れしめ困難にして且往々報酬之に伴はさる勤務に服するも泰然自若たる者は下士にあらすや其の任務たる等しく崇高偉大なり故に兵卒は其の好意と其の力行とを以て

之か任務の遂行を容易ならしめさるへからす故に如何なる點より觀するも軍隊に在ては下級者は上級者を尊敬すへき義務あるものとす是卽ち縱令其の隷屬する所にあらすとも凡て敬禮を盡すへしと宣はれたる所以なるへし。

又上級の者は下級のものに向ひ聊も輕侮驕傲の振舞あるへからす公務の爲に威嚴を主とする時は格別なれとも其外は務めて懇に取扱ひ慈愛を專一と心掛け上下一致して王事に勤勞せよ。

輕侮とは輕蔑侮辱なり卽ち下を賤むなり驕傲は驕泰傲慢なり卽ち下に高ふるなり慈愛は慈育愛撫するなり王事は皇國の事業なり勤勞とは勉勵努力するなり。

私かに案するに部下及下級者の上級者に對する服從の心得は上文聖諭に示されたる如し猶上級の者も亦下級の者に向ひ決して輕侮の

所爲、驕傲の態度あるを許されす抑も軍人禮儀の結果たる軍紀の基礎は服從に在り服從には部下尊敬の心と信頼心とを必要とするは前に述へたる所なり然れとも此服從をして尙一層鞏固ならしむるには一片愛慕の心を必要とす換言すれは眞正の軍紀なるものは上下將卒一致和諧し各人自然に規律を守り中心より上長に服從し熱誠軍務に努力する如くならさるへからす「有子」曰く(禮の用は和を貴しとなす先王の道斯れを善となし小大之に由る)と之か爲には上官も亦自ら諸法則を遵奉し禮義を正しくし服從の道を守り部下と辛苦を分ち身を以て範を示すを必要とす昔支那に吳起將軍なる人あり好く兵を用ふ其の將たるや士卒と衣服を同うし之と勞苦を分つ故に士卒皆之か爲に死せんことを願へり曾て卒に疽を病むものあり起爲に吮ふ卒の母聞て哭す或ひと曰く汝の子は卒なり而して將自ら其の疽を吮ふ名譽の大なるものにあらすや何爲れそ哭すると母の曰く然るに非さるなり往

年吳公其の父を吮ひしかは其の父戰て踵を旋さす遂に敵に死せり今又其の子を吮ふ妾其の死所を知らす是を以て哭すと宜なり吳起の戰ふや攻むれは必す取り戰へは必す勝ちしや六韜に曰く(將は冬も裘を服せす夏も扇を操らす雨ふれとも蓋を張らさるを名けて禮將と云ふ將身に禮を服せされは以て士卒の寒暑を知ることなし隘塞を出て泥塗を犯して將必す先つ下り步むを名けて力將と云ふ將身に力を服せされは以て士卒の勞苦を知ることなし軍人皆次を定めて將乃ち舍に就く炊く者皆熟して將方に食に就く軍火を擧けされは將も亦擧けさるを名けて止慾の將と曰ふ將身に止慾を服せされは以て士卒の飢飽を知ることなし將士卒と寒暑勞苦飢飽を共にす故に三軍の衆鼓聲(進軍の譜)を聞くときは喜ひ金聲(退軍の譜)を聞くときは怒る高城深池矢石繁く下るも士先を爭ひて登り白刃始めて合するとき士先を爭ひて赴く是士の死を好んで傷を樂むにあらさるなり其の將の勞苦飢飽を

知ることの審にして寒暑を見るの明なるか爲なり)と又昔羅馬の俊傑「該撒(セザール)」の軍に將たるや部下の愛慕熱誠は非常にして「該撒」の武名の爲には如何なる危險をも顧みさりし普留達克(プリュタルク)其の英雄傳中に述へて曰く(「該撒」は士卒に與ふるに賞與と名譽とを以てし此熱誠を涵養激勵せり彼は其の獲得せる戰利品を自身の奢侈娛樂の爲に使用せることなし各人勤勞の報酬として之を保管し悉く之を有功者に頒與せり彼は躬自ら危險を冒し疲勞を意とせさりし然も部下は毫も之を怪ます蓋し「該撒」か武名を愛するの大なるを知れはなり唯部下の深く感嘆せるは彼か體力以上の耐忍力を見はせるに在り彼は曾て腦病及癲癇病を病めり其の結果體質虛弱、顏色蒼白、皮膚脆軟なりしも彼は決して之を以て柔弱なる行爲の口實となささりき却て强行軍、粗食、露營等激烈なる軍務に依て疾病を克服せんことを試みたり彼は概ね車中又は轎內に臥し以て成るへく休憩の時間を軍務に利用せり晝は城塞、市街、築城工

事を巡視しつつ常に筆記に慣れたる書記を傍らに伴ひ又劍を携へたる兵卒を其の後方に從へたり彼は第一回の戰役に於て羅馬出發後僅に八日にして「ローヌ」河上に達せり彼は幼時より騎乘に慣れ轡を垂れ手を背にして騎行する習癖あり「ゴール」の役彼は馬上より口演して二名の書記を同時に使用せり彼は如何なる多忙の時に在りても書牘を以て其の友人等と通信するを怠らす其の生活は頗る質素なりき一日彼は「米蘭(ミラン)」なる「ヴアレリユス、レヲ」の家に於て饗應を受たるとき主人は天門冬(「アスペルジュ」)に添ふへき「ヲリーブ」油を缺きしを以て換ふるに他の油を以てせしか「該撒」は快く之を食し後之を嫌忌して云々せる諸人を叱して曰く諸君の意に充たされは食はさる可なり其の野卑を云々するは却て自己の野卑を表するものなりと一夕暴風雨に遭ひ之を一貧家に避く屋內僅に一人を容るへき室あるに過きす彼は其の從者に謂て曰く最も名譽ある位置は最も上級者に讓るを要す然れとも最

も必要なる室は最も病める者に與ふるを要すと而して之に病者「ヲッピュス」を臥せしめ自身は他の諸人と共に戸外なる檐下に夜を徹せり))と吾人は幸に御威德洪大なる　聖上陛下に隷するを以て部下の統御上必すしも此異域の人の如く苦辛せさるも部下は　陛下の爲國家の爲熱誠職務に勉勵しつつあり然れとも下級の者に對し輕侮驕傲の所爲あるは決して許容せられさるなり但し公務の爲には威嚴を主とすへきは勿論苟も法規を無視し軍紀を紊る如きものあるときは毫も假借する所なく之を責罰矯正し決して姑息の處置を許さす又命令の如きも一たひ之を下さは必す實行を期し之を犯すものあらは斷然たる處置に出てさるへからす是命令法規なるものは決して己れの命令法規にあらす取りも直さす　陛下の命令國軍の法規なれはなり有子曰く((和を知て和すれとも禮を以て之を節せされは亦行はるへからす))と昔漢の丞相「諸葛亮」君に仕ふる誠忠にして兵を用ふること神の如く政刑私なし曾て祁山を攻む部將「馬謖」亮の節度に違ひ敗軍す「馬謖」は亮の友人なり而も法枉くへからす亮流涕して之を斬り而して其の後を卹みたりと云ふ諺に所謂涕を渾て馬謖を斬るなる者是なり「李平」「廖立」等の諸人皆亮の爲に廢せられたるも亮の死を聞くに及ひて皆歎息流涕し卒に病を發して死するに至れり史に稱す亮誠心を開き公道を布く刑政峻なりと雖も怨む者なしと是故に信賞必罰は軍紀振肅の一法にして優柔姑息情實に流るるは決して士心を得る所以の道にあらす孫子曰く((卒を見ること嬰兒の如し故に之と與に深谿に赴くへし卒を見ること愛子の如し故に之と俱に死すへし愛して令すること能はす厚くして使ふこと能はす亂れて治むること能はされは譬へは驕子の如し用ふへからさるなり))と又曰く((卒將を畏ること敵よりも甚しきものは勝つ))と是皆公務の爲に威嚴の必要なるを言ひしなり尙威嚴に就て一言せんに威嚴とは其の服裝姿勢を正しうし其の瞻視を尊くし儼

然として人望んで之を畏るるを謂ふなり獰猛慘酷の謂にはあらざるなり要するに上級の者は下級の者に對し勤務演習等公務上に於ては十分嚴格に監督訓練し寒暑を避けず危險を冒し進て艱難困苦に當り全力を盡して軍務に從事するの良習慣を養成すべしと雖も其の他の場合に於ては懇切慈愛を旨とし恩威竝ひ行はれ部下の敬愛する所となるを要す此の如くして始めて上下一致和諧協同大に　皇室國家の爲に貢獻することを得へきなり。

尙服裝に就て一言せん夫れ服裝は禮の表彰なり其の不正なるは精神の不正を表はすに等し又服裝端正ならされは威嚴なし昔者佛帝拿破崙第一世善く兵を用ふ軍容堂々歐洲諸國能く之に敵するものなし皆以爲らく佛兵は神兵なりと而して西曆千八百十二年北の方露國を征するや諸國皆兵を出して之に從ひ其の年六月「ニエメン」河を渡りしもの實に四十有餘萬人然るに一旦大雪に遇ひ敗退して歸るや沿道の人民佛國兵士の弊衣破靴を裝するを見以爲らく是神兵にあらす與みし易きのみと皆起て佛國に叛きしかは拿破崙の將星は遂に光を失ふに至れり是故に服裝のことたる事小なるか如くして然らす一軍一隊の威嚴に關し隨ひて勝敗に關するに至る忽かせにすへからさるなり又米國の名將「ワシントン」は少時自ら戒むるの語に(手套の裝著法をも省みて自ら正しくすへし)と云へり卽ち服裝容儀の如何に心術に關係あるかを知るへし殊に武器に到りては以て敵を殺し勝を制する所の具にして軍人の爲には最も貴重のものなり昔時の軍人は武器を以て其の精靈なりとし又(刀の手前)と云ふことあり味ある語なり吾人も亦此等祖先の精神を失墜することなく兵器尊重心を養はさるへからす其の他公德心の涵養上官物を鄭重にするの習慣を養ふこと亦必要なり。

終りに本　聖諭に王事に勤勞せよと宜はれたり此勤勞に就きて一言

せん夫れ個人の發達進歩するは勤勞の結果なり一國の隆興繁榮も亦舉國臣民の勤勉力行に待たさるへからす彼の天地間の現象を觀すや春去り秋來り風行き雨施こし四時循環して一刻も休止することなし故に易の大象傳に(天行は健なり君子是を以て自ら疆めて息ます)と云へり古より英傑偉人の大業を成すや勤勉力行せさるもの殆んと之なし普王「風烈鐵騎」大王の勤勉は有名のものにして王曾て曰く(予か休息せんとする所は唯三尺の墳墓のみ)と佛帝拿破崙第一世の精勵も亦異常にして其の軍中にあるや或は深夜歩哨線を巡り或は躬ら燈火を把りて翌日の進路を開き又著々事務を處理するの傍ら古今の書史を渉獵せしかは(疲勞を知らさる「勃那巴爾的」)なる綽名を博せり、我か　大元帥陛下の萬機に御精勵にして殊に大御心を軍事に注かせ給ふことは吾人の知悉せる所今茲に述ふるも畏こし又大正元年の御勅諭にも拮据勵精各其の本分を竭くしと宣はせられたり故に吾人は熱心奮勵寒暑辛苦を厭はす孜々蹇々軍務に勉勵し以て　聖諭の御趣旨に酬い奉らさるへからす。

若軍人たるものにして禮儀を紊り上を敬はす下を惠ますして一致の和諧を失ひだらんには啻に軍隊の蠹毒たるのみかは國家の爲にもゆるし難き罪人なるへし。

蠹は木中の蟲なり。

私かに案するに禮儀は下の爲には尊敬を徴し上の爲には慈愛を要求す下たるもの上を敬はすんは則ち秩序なく上たる者下を惠まされは則ち恩愛なし已に秩序なく又恩愛なきときは是不軍紀の軍隊なり安そ共同一致を望むへけんや萬一軍人にして此　聖諭を解せす驕傲無禮なるものあらは忽ち上下の乖離を來たし敗軍の基たるへし昔上杉謙信は勇猛無比の名將なりしも時として部下を侮辱せしことあり其の大に威を天下に伸ふる能はさる是其の一因たらすんはあらす(忍城

主成田長泰を毆打せる如き其の一例とす)又織田信長は朝廷を尊ひ智勇兼備の良將なりしも數〻明智光秀を凌辱せる爲遂に其の戕害に遇ひ大業を成就する能はざりき。

凡て上官たるもの部下の失態を見るや其の全く過失に屬するものは獨り其の本人のみを呼ひ其の注意の足らざる所を指摘し懇篤嚴正に訓誡を加へ後來を戒むるを要す稠人殊に其の部下の面前にて之を罵詈するか如きは適當の處置にあらす之に反し其の失態にして苟も故意又は怠慢に出つるか若くは之を默止する時は部隊全般を害するか如きものにありては衆中に於て痛く之を叱責するも妨なきのみならす之に嚴罰を科するを要す。

其の他往時は兵營内に於て將校下士又は故參兵にして往々新兵を虐待酷使する等のことありたるか如し此の如きは上下の和諧一致を害するのみならす世人をして軍隊を嫌忌するの念を生せしめ其の罪輕からすとす實に　聖諭にも『啻に軍隊の蠹毒たるのみかは國家の爲にも許し難き罪人なるへし』と宣はれたれは此等は深く戒むへきことなりとす。

終りに禮儀を正しくする爲守るへき格言を擧けん曰く(非禮視る勿れ非禮聽く勿れ)曰く(己れに克て禮に復へる)と是なり即ち苟も軍紀を紊り又は猥褻に渉るか如き圖書言論の如き之を視之を聽かさるを以て賢なりとす是即ち禮儀を正しくするの一端なり。

一、軍人は武勇を尚ふへし。

武とは健なり威なり斷なり勇とは氣力なり果敢なり剛鋭にして懼れさるなり括言すれは武勇とは剛健英邁にして危きを避けす死を怖れさるの德を謂ふなり。

夫武勇は我國にては古よりいとも貴へる所なれは我國の臣民たらんもの武勇なくては叶ふまし。

私かに案するに　皇國元と武を以て國を立つ諾冉二尊瓊矛を以て滄溟を探り三種の神器劍其の一に居る則ち神祖の教を垂るること深く且遠きを知るへし故に皇國の歴史は殆んと武勇の歴史なり實に古來人口に膾炙せる勇行武德を喚起するときは則ち思ひ半はに過くるものあり依て左に其の數例を掲けん。

昔素戔嗚尊武勇の德を備へたりしも一時暴行ありけれは　天照皇大神之を出雲に謫し給へり尊簸の川の上りに至り哭聲の甚た哀しきを聞く往き見れは翁媼一少女を擁して泣きつつあり之を問へは則ち曰く國に妖蛇あり八頭八尾毎年來りて人を呑む小臣八女ありしか既に其の七を喪へり餘す所唯此の一少女のみ今亦將に害せられんとすと尊此の毒蛇を除かんことを約す乃ち容を變して少女となり八間棚屋を作り下に八槽の醞を置き坐して以て待つ期に至り果して巨蛇の來るあり酒を呑みて醉ひ睡る尊劍を拔き斬て之を寸斷にす尾に至りて

又少しく缺く怪みて之を割けは一の寶劍を得たり乃ち之を大神に獻す(上を怨みさるの美德を觀るへし)初め蛇の在る所上に常に雲氣あり故に此の劍を號して天の叢雲の劍と曰へり。

景行天皇の御宇筑紫の熊襲叛す皇子日本武尊をして之を征せしむ皇子時に年十六女裝して竊かに其の國に入り梟帥川上を刺して之を殺せしかは諸國の叛徒咸く讋服せり後ち東夷叛す復た皇子をして之を征せしむ皇子兵を率ゐて駿河に邸る賊僞り降り皇子を誘ひて獵せしめ原を焚て圍み攻む皇子叢雲の寶劍を拔て草奔を剪伐し又燧を鑽て火を縱つ會〻大風起り烟焰反て賊軍を掩ふ衆乃ち勢に乘して奮擊し賊をして大敗せしめたり之より叢雲の劍を改めて草薙の劍と名けられたり。

仲哀天皇の御宇熊襲又叛す天皇皇后と共に親征し未た克たす中道にして崩御し給ふ皇后以爲らく熊襲の屢叛するは其の背後に新羅の支

援あるか爲なりと是に於て皇后意を決して新羅を征す戰艦海を蔽ひ鼓聲天に震ふ新羅王大に驚き迎へ降り叩頭して誓て曰く設令太陽西より出て鴨綠江逆さに流るるとも朝貢を闕くことなけん後世子孫若し此の盟を渝へは天神地祇共に極罰せんと左右新羅王を殺さんことを請ふ皇后曰く王自ら降服す之を殺すは不祥なりと之を宥し杖つく所の矛を城門に樹てて還る新羅の人畏服し敢て此の矛を撤せさるもの數十世高麗、百濟の二國も亦款を納れ西藩と稱し永く朝貢を絕たさりき依て神功皇后と謚し奉れり。

敏達天皇の御宇新羅叛す乃ち大將軍、紀の男麿をして之を討せしめらる我軍利あらす調ノ伊企灘虜の擒にする所となる虜勸誘して降らしむ從はす虜刀を拔き之に逼りて曰く汝須らく言ふへし日本の將我臀を餞へと伊企灘大に呼て曰く新羅王予か臀を餞へと竟に殺されたりと云ふ。

齊明天皇の時蝦夷屢叛さしかは阿部の比羅夫をして之を討せしむ比羅夫舟師を率ゐて肅愼に至りて歸る。

後三年の役源義家金澤の壘を攻む部下に平景政なるものあり鎌倉の權五郎と稱す年甫めて十六前鋒となり賊に其の一目を射らる景政屈せす進て其の賊を射殺し而して後に人に其の矢を拔かしめたり。

義家武勇拔群八幡太郎と稱す曾て堀河天皇瘧を病みしことあり義家に詔して宿直せしむ義家前きの戰役に用ゐし所の黑弓を張り弦を鳴らすこと三たび天皇の病立ろに癒へたりと云ふ初め義家父頼義に從つて軍に在り清原武則堅甲三領を聚め標的となし其の射を試みんと請ふ義家一發三甲を貫く武則曰く神なり人の及ふ所にあらすと。

義家の曾孫爲朝亦膽力人に過く年十八にして已に九州に覇たり鎭西八郎と稱す保元の亂に罪を得て大島に流され居ること數歲諸島嶼を攻略す伊豆守狩野茂光舟師を帥ゐて之を討し舳艫相銜みて來る爲朝

巨鏃の箭を以て其の先進船を射る箭船底に透りて出つ船乃ち沈没す衆畏縮して進まず爲朝一笑して去り逃れて琉球に至る舜天王は實に其の子なり傳へ云ふ疱疱の疫神船に搭して東方より來るや爲朝矢を擬し之を一喝すれは疫神驚き去れりと蓋し爲朝の武勇能く衞生法を勵行し疫疾を驅除せしを謂ひしならん。

源三位頼政は頼光の裔なり武技を善くす時の天皇曾て不豫なることあり怪鳥毎夜鳴て御寢殿の屋上を渡る乃ち頼政に勅して之を射らしめしかは天皇の病乃ち癒へたりと云ふ。

龜山天皇の御宇「蒙古」の「忽必烈」(元の元祖)朔漠の野に起り「趙」「宋」を併呑し支那四百州悉く其の馭内に在り遂に其の强勢を挾んで　皇國に臨み　皇國をして懾服せしめんと欲し使を致し書を寄せて曰く服せすんは則ち兵を尋かんと朝廷之に答へす元主復た使者を遣はすこと數回朝廷皆之を斥く文永十一年元兵約一萬來りて對馬及壹岐を侵す鎭西

の將少貳景資力戰之を破る後宇多天皇の御宇元の使者杜世忠等九輩復た至る鎌倉の執權北條太郎時宗其の書辭の無禮なるを見て之を龍口に斬り同時に太宰府の海岸城を修築する等益〻武備を嚴にす弘安二年元使復た至る復た之を斬る「元」主　皇國の天威を知らす大に憤恚し漢、胡、韓の兵凡そ十餘萬人を合せ范文虎を以て之に將として入寇す龜山天皇深く之を憂へ給ひ親書を伊勢の大廟に上つり玉身を以て國難に代らんことを禱り給へり四年七月敵艦舳艫相銜み水城(ミヅキ)に至る我諸將草野七郎、河野通有、安達次郎、大友藏人等奮戰之を防く元兵遂に上陸する能はす退て鷹島に據る閏月大風雷あり(所謂伊勢の神風)敵艦敗壞す少貳景資等因て奮擊敵兵を鏖にす伏屍海を蔽ひ海歩して行くへし敵兵十萬脫れ歸るもの纔に三人是より元人復た我邊境を窺はす。

北條時宗は時頼の子なり人となり强毅不撓幼にして射を善くす曾て極樂寺の邸第に射的會あり將軍「小笠懸」を觀んと欲す顧みて諸士に命

するも敢て應するものなし時頼曰く太郎之を能くせんと太郎は時宗か幼字なり召して場に上らしむ時に年十一、馬に跨かりて出て一發して中つ萬衆齊く呼ふ時頼曰く此兒必す負荷に任へんと後果して驗ありき。

其の後伊豫の國の住人、久留島、野島、因島の鄕士等各其の一族を集めて團隊を編成し年々船を海外に出し外國を搶掠せること多年西は明の山東、江南、福建、廣東、廣西より南は安南、廣南、古城、東玻塞、暹羅等の諸國及呂宋、渤流泥諸島に至るまて皆此海寇に苦まさるものなかりき外國の書に倭寇と稱して畏怖せるもの卽ち是なり。

其の他坂上ノ田村將軍の如き、源九郎義經の如き、楠河州正成の如き赫灼たる武勇の事蹟は數へ來れは枚擧に遑あらす殊に戰國時代に於ては英雄豪傑雲の如く起りしかは勇行武德亦尠からさりしも唯惜むらくは其の行爲一局部に偏し大に皇國の爲に發揮するに至らさりき。

豐太閤群雄を駕御し之を八道の野に縱つに及ては大に見るへきものあり此際衆に擢て武勇の德を備へたるものは夫れ加藤清正か。

此の如く皇國に於ては太古の時代より上皇室を始め奉り下一個人に及ふ迄武を尙ひ行ひに勇みけれは忠節を勵み信義を重んするの風は闔國に瀰漫し大和魂の修養となり武士道の鍛錬となり遂に過くる明治二十七八年、同三十七八年及大正三年の戰役に至り大に皇國の光華を世界に宣揚したり。

況して軍人は戰に臨み敵に當るの職なれは片時も武勇を忘れてよかるへきかさはあれ武勇には大勇あり小勇ありて同からす血氣にはやり粗暴の振舞なとせんは武勇とは謂ひ難し。

私かに案するに武勇は人の大德なり其の至れるに及ては疫癘妖邪其の影を匿くし萬魔百鬼其の形を沒す恰も彼の朝陽一たひ出てて魍魎

潜み消ゆるか如く東風一たひ到りて霜雪融解するか如し國家之に依て安く敵國之に依りて降伏す大なる哉武勇の德や是故に武勇の德は獨り軍人のみならす苟も剛健勇武なる祖先を戴ける　皇國の臣民たるもの武勇の德を具へすして可ならんや況や軍人なる者は國家緩急の場合に當り戰に臨み敵に當り之を擊破するを以て職分となす者なれは寢食寤寐の間も武勇を忘るるを許さす實に人各職分あり農家は耕耘殖産し工師は興業製作し商人之を賣買し政治家は政務を整理し且之を監督す此等の人々は技藝を要し又學術智能を要するも絶對的の武勇を具備するを要するは獨り軍人に在り實に軍人は直接敵に當り彈丸雨注人肉星飛の間に立ち耳を聾する交戰の喧噪を聞き瀕死の戰友を目擊し負傷者の呻吟を耳にして而して其の躬自らも死亡若くは不具の危險に近つきつつあるを知るも泰然自若勝を硝煙の裡に制すへきものなれは武勇なくして其の職を盡し得へきにあらす然りと

雖も武勇には大勇あり小勇ありて同しからす偶然人の辱を受け腕を扼して起ち劍を拔て爭鬪する如きは是　聖諭に所謂血氣にはやり粗暴の振舞をなすものにして思慮なき匹夫の小勇のみ安そ之を眞の武勇と謂ふへけん天下大勇のものあり卒然として之に臨めとも驚かす故なくして之に加ふれとも怒らす是其の修養する所甚た深く其の志甚た崇高遠大なるに因らすんは、あらす幕末の偉人藤田東湖は又其の著弘道館記述義中に述へて曰く(夫れ日出の鄕は陽氣の發する所、地靈に人傑に食饒く兵足る上の人は生を好み民を愛するを以て德となし下の人は一意公に奉するを以て心となす其の勇武に至りては則ち皆天性に根つく此れ國體の尊嚴なる所以なり抑も所謂勇武なるものは惟に勁悍猛烈以て其の威を逞うするにあらす蓋し亦必す忠愛の誠に發するなり)と下文　聖諭に於て武勇の修養法を示し給ふ。

軍人たらんものは常に能く義理を辨へ能く膽力を練り

思慮を殫して事を謀るへし。

義理とは道義天理なり卽ち人の義務、物の道理なり膽力とは事に臨みて懼れす變に處して心を動かさざるの度胸なり思慮を殫して事を謀るとは智慮のあらん限りを盡して行爲事物を計畫區處するを謂ふ。私かに案するに眞の武勇なるものは義理に合せさるへからす義理に合せさる小勇は眞の武勇にあらす却て世の害をなすことあり夫れ忠節を勵み禮義を正しくし武勇を尙ひ信義を重んし質素を旨とする此五箇條は後文　聖諭に示されたる如く天地の公道人倫の大經にして獨り軍人のみならす苟も我日本國民たるものの須臾も忘るへからさる事に屬す此諸德を體して事を行へは內に省みて愧ち怍(スヽ)るる所なく自ら快きを感すへし是則ち天理にして又人の義務なり唯之を行ふにあたり惑を生することあり是人慾卽ち私慾の發生するに因る人心は固と忠純なり然るに私慾ありて之を蔽ふ恰も彼の明鏡素と一點の陰翳なきも烟塵之を蔽ふことあるか如し故に吾人は百方此私慾を制することに努力せさるへからす換言すれは眞の武勇を具備するには此義理と私慾とを辨別すること必要なり但し人には皆慾情あり故に勞逸に就て之を謂へは人は勞を避けて逸に就き利害に就て之を言へは人は利を求めて害を避く生死に就て之を言へは人は生を欲して死を惡む飲食、居宅、衣服の用、視聽言動の閒人皆此慾情あるを免かれす如何なる名將達人と雖も亦皆此慾情あり唯其の輕重を辨へ以て人たるの道を踐み誤らさるのみ例へは君、父、夫、兄は我爲に重し臣子婦弟は我爲に輕し皇室國家は我一身一家より重し此輕重を辨することは則ち義理を辨するの道なり山鹿素行其の「士道」中に述へて曰く(生死の場此一刹那に在りと云ふとき君の爲め又は人の爲め其の重きものの爲めに害あらんに於ては速かに死して顧るへからす我重きものの爲めに害なきに於ては能く養て命を全くするにありぬへし)と又變に臨み事

を處するに當り若し疑惑することあらは此事は果して義理に合するや將又私慾にあらさるかを一考すへし萬一私慾なるときは斷然之を排棄し義理の方向に進まさるへからす其の他吾人の今日言ふ所行ふ所義理に合するか如しと雖も苟も其の目的たる之を以て己れを利せんとするか如きは則ち私慾なり例へは品行を正しうし職務に勉勵するは大に可なり然れとも其の目的之を以て上官の信用を博するにあるか或は之を以て世間の名聞を求めんとするか如きは誤りなり然り躬行を慎み職務に勉勵せは上官は之を嘉みするならん人は之を譽むるならん又隊の成績は擧るならん然れとも此の如くにして上官之を嘉みせす人之を譽めす隊務擧らすと雖も毫も意に介するに足らす是品行を正しうし職務に勉勵するは人の人たる道なる故に之を行ふなり毀譽褒貶の爲には顧はらさるなり是則ち人物の大なる所以にして變故に處し大節に臨みて從容逼らす湛然動かす行動機宜に適するを得へきなり

聖諭の所謂義理を辨へよとは卽ち此事にして實に武勇の根源なり此の如くにして始めて皇室國家の爲には鼎鑊も甘きこと蜜の如く百萬の富嬋媚の美も以て其の心を亂るに足らす戰に臨みて生命を鴻毛の輕きに比するを得ん物に懼れす心を動かさざるの力は卽ち膽力なり此膽力は人生れなからにして之を具ふるものあり否らさるものあり之を練るに道あり之を養ふこと頗る難し神經鋭敏頭腦明晰のものにありて殊に然り故に鍛練して漸次之を修養するにあらされは完全の域に達し難し古への聖賢猶之を難しとせり孔子曰く(予四十にして惑はす)と孟子も亦曰く(予四十にして心を動かさす)と程子曰く(怒を治むるは難し懼を治むるは最も難し)と又如何なる明君英將と雖も始めて戰場に臨みたるときは或は戰慄し或は顏色を變することあり然も之を以て其の人天性怯懦なりとするを得す傳へ云ふ佛國の名將「チュレンヌ」(路易第十四時代の將軍にして其の靈柩は今や拿破

崙第一及名將「鉈盤」等の柩と共に巴里の中央拿破崙廟内に安置せらる禮拜するもの絶えず)は戰場に臨みて戰慄するを常とせり爾の時自ら己れの體軀に向ひて曰く(瘠軀汝は戰慄す然も汝は予か今將に汝を導かんとする所に至らは益戰慄するならん)と拿破崙第一の如きも始めて議會に臨み演說を試みたる時覺えず戰慄せりと云へり其の他生れ乍にして水を恐れ後ち海軍の創造者となりし人あり(彼得大帝の如き)又天性雷鳴を恐れ後ち自ら此氣質を矯正せられたる明君あり又北條氏康十二歳の時小銃始めて傳來せしか諸士之を試みたるとき氏康其の音響に驚けり諸士乃ち密かに之を嘲笑す獨り其の傅清水なるもの曰く猛き武者は物に驚くと聞く駿馬の如きも亦然り將來名將たるを妨けすと後ち果して名將となれり米將「克蘭土」の如きも其の自叙傳中に述へて曰く初め中少尉として戰場に臨みたるときは毫も恐怖の念なかりしか後ち聯隊長として敵と相對峙するや憂懼禁する能はさり

きと其の他此の如きの例枚擧に遑あらす是毫も怪むに足らす其の恐怖戰慄するは氣なり其の之を制し敢行するは志なり明君英將は能く其の强健なる意志を以て其の一時の氣を制す孟子浩然の章に述へて曰く(志は氣の帥なり氣は體の充てるなり夫れ志は至れり氣は次く故に曰く其の志を持して其の氣を暴ることなかれ)と又曰く(志壹なれは氣を動かす氣壹なれは志を動かす今夫れ蹶く者趨る者は是氣なり而して反て其の志を動かす)と志とは卽ち義理に鑑み任務を全うせんとするの意志なり此意志熱心に過くる時は則ち責任を重んするの結果氣を動かし膽力を減することあり又其の眼前の光景に眩惑し氣に專らなるときは之か爲に其の意志を動かさるることあり故に兩者共に相待て膽力を養はさるへからす然れとも意志は最も重要なるを以て一時の氣の爲に之を奪はるることなきに注意すること肝要なり天理と人欲とを辨別し膽力を錬り湛然の性を全くするの修養法は王陽明

之を氣質を變化すと唱へたり曰く(氣質を變化するも居常見る所なし唯利害に當り變故を經屈辱に遭ふ時平時忿怒するもの此に到りて能く忿怒せす憂惶措を失ふもの此に到りて能く憂惶措を失はず始めて是能く力を得るあるの處亦便ち是力を用ふるの處天下の事萬變すと雖も吾か之に應する所以の者喜怒哀樂の四者に出てす此れ學者の要にして政を爲すも亦其の中に在り)と又曰く(君子の學は務めて己れに在るものを求む毀譽榮辱の來るあるも以て其の心を動かさす且らく之に資りて以て切磋砥礪の地となすのみ故に君子は入るとして自得せさるなし正に其の入るとして學にあらさるなきを以てなり若し譽を聞きて喜ひ毀られて戚むときは則ち將に外に遑々として惟れ日も足らさらんとす其れ何を以て君子たらん)と又曰く(君子の所謂敬畏なるものは恐懼憂患する所あるの謂にあらさるなり乃ち睹さるに戒慎し聞かさるに恐懼するの謂のみ君子の所謂灑落なるものは曠蕩放逸

情を縱にし意を肆にするの謂にあらさるなり乃ち其の心體慾に累はされす入るとして自得せさるなきの謂のみ是灑落は天理の常に存するに生し天理の常存は戒慎恐懼の間なきに生すれはなり)と、已に義理を辨へ皇室國家に對する義務の重きを知り膽力の修養已に至り事に臨みて懼れす變に處して心を動かさざるの域に達するも思慮周到を缺くときは亦國家有爲の人たるを得す昔賤ヶ岳の戰に佐久間玄蕃盛政の如き其の主柴田勝家に對する忠誠にして能く義理を辨へ又其の膽力も人に勝れ中川清秀を一戰に擊碎せしも智慮足らさる所あり勝家の言を用ゐすして其の地に留まり遂に秀吉の乘する所となれり又彼の福島正則の如き武勇絶倫なりしも思慮缺くる所あり些細の感情に制せられて關原の戰に家康の先鋒となり遂に其の主家を亡ほすに至れり故に軍人たるものは忠君報國の志厚く大義の重きを知るへきは勿論次には膽力のみならす併せて智略を養はさるへからす聖諭

に所謂思慮を殫して事を謀るへしとは卽ち是なり。

夫れ武勇は天性なり然れとも鍛錬に依り之を修養するを得へし公孫丑孟子に問うて曰く心を動ささるに道ありや曰く有りと吾人は此點に於ても亦試みに孟子浩然の章を引用せん昔北宮黝なる人あり其の勇を養ふの方法たる膚撓ます目逃ろかす(肌膚刺さるるも撓屈せす目刺さるるも睛を轉せさるを云ふ)一毫を以て人に挫しめらるること市朝に撻たるるか如し褐寛博(寛大の毛布なり賤者を指す)にも受けす亦萬乘の君にも受けすと云ふにあり是匹夫の勇のみ　聖諭の所謂血氣にはやり粗暴の振舞等なすものに近し黝は蓋し刺客の類ならんか又孟施舍なる人あり其の勇を養ふの方法たる曰く勝たさるを見るも猶勝つか如くせよ敵を量りて而して後に進み勝つことを慮かりて而して後に會戰するは是三軍を畏るるものなりと此修養法は膽力を養ふの點に於ては可なり然も未た以て武勇と謂ふへからす是義理と思慮とを措て問はされはなり施舍は如何なる大敵に遭ふも懼れさるへし然れとも敵に勝つこと能はさるへし故に眞の武勇にはあらす告子の勇を養ふや曰く言に得すとも心に求むる勿れ心に得すとも氣に求むる勿れと是其の言行達せさる所あるも之を捨て置き必すしも其の理を心に求めさるへく又心に於て安んせさる所あるも力めて其の心を制して必すしも其の助を氣に求めさるへしとの意ならん孟子は之を駁して曰く心に得すとも氣に求むる勿れと云ふは可なり言に得すとも心に求むる勿れと云ふは不可なり是其の本末を顚倒するを以てなりと之に反し曾子(孔子の弟子)の勇を養ふの方法たる曰く吾嘗て大勇を夫子(孔子を指す)に聞けり自ら反みて縮からすんは褐寛博と雖も吾慴れさらんや自ら反みて縮くんは千萬人と雖も吾往かん孟子は曰く我れ言を知る(德あるものは必す言あり義理を辨ふるを言ふ)我れ善く吾か浩然の氣を養ふと公孫丑曰く敢て問ふ何をか浩然の氣と謂ふ曰

く言ひ難し其の氣たるや至大至剛直きを以て養ふて害することなけれは天地の間に塞かる(彷彿として和氣清麿及伯夷叔齊を想ふ)其の氣たるや義と道とに配して是餒うることなし是集義の生する所にして義襲うて之を取るにあらす(自然に生するものにして強て之を發生せしむるにあらす)行ひ心に慊からさる所あれは則ち餒う矣と孔子曰く((死生命あり))と佐藤一齊其の言志錄中に之を釋して曰く(生物は皆死を畏る人は其の靈なり當さに死を畏るるの中より死を畏れさるの理を揀出すへし思ふに我身は天の物なり死生の權天に在り當さに順て之を受くへし我の生るるや自然にして生るるとき未た嘗て喜を知らす則ち我の死するや應さに亦自然にして死し死するとき未た嘗て悲を知らさるへし天之を生して天之を死せしむ一に天に聽くのみ吾何そ畏れん云々)(西郷南洲曾て之を手抄せり)と此孔孟の養勇法たる完全に近し蓋し義理を以て主とすれはなり然れとも其の言未た盡さ

さる所あり其の思慮に言及せさるを以てなり拿破崙第一曰く戰爭に缺くへからさるは思慮なり乃ち敵兵を思慮し我兵を思慮する是なりと又曰く戰爭に於ては明亮にして且精密なる思慮を要すと大將マルモン曰く(軍人の具ふへき資質二つあり曰く智力曰く膽力是なり智力を欲す是之なけれは一事をも計畫する能はす一戰を交へすして止めはなり膽力を要す是之なけれは其の畫策したる企圖を決行する能はされはなり此兩性能は相俟て一方を缺くへからす但し兩者何れか重きやを問はは膽力の常に智力を制すること必要なりと答へんとす今數字を以て之か價を定むれは予は智略五分膽力十分の勇將を愛し智略十六分膽力八分の智將を取らさるなり何となれは膽力若し智力を制し而して智略も多少存在すれは其の人は所決の目的に向て勇進し能く之に達すへし之に反し智力若し膽力を制するときは其の人は時々決心を飜すへし是智識に富むを以て刻々事物を新様に思考すれは

なり此時若し膽力に依り此變心を制せさるときは其の人は岐路の間に彷徨し斷々乎として其の一を決行する能はす其の目的に近邇せすして却て之より離隔し狐疑躊躇遂に大事を誤るに至る)と是故に軍人たる者は膽力思慮其の一に偏することなく相伴ひて之を鍛錬修養し之を貫くに理義を以てすること必要なるへし。

終りに軍人は戰に臨みては其の家を忘れ敵を見ては其の身を忘れ天皇陛下の御爲には命を鴻毛の輕きに比すへしと雖も亦平時濫りに死を輕んすへきにあらす殊に上官の呵責に遇ひ又は勤務の苦に堪へすして自殺を謀るか如きは甚た不義理にして不忠の行爲たるを免れす。

要するに聖諭の所謂義理を辨ふるは仁なり仁は人なり即ち人道大義なり膽力を錬るは勇なり思慮を彈して之を謀るは智なり換言すれは眞の武勇なるものは知仁勇の三德に合せさるへからす吾人は聖諭を拜讀して聖旨の懇篤且深遠なるを悟らさるへけんや。

小敵たりとも侮らす大敵たりとも懼れす己か武職を盡さむこそ誠の大勇にはあれ。

私かに案するに已に義理を辨へ膽力の一たひ定まる時は忠義の爲には如何なる大敵と雖も恐るるに足らす又思慮周到にして油斷なき時は小敵たりと雖も侮り輕んすへきにあらす此の如くにして軍人は始めて能く己れか職分即ち武職を盡すを得ん眞の大勇とは則ち是なり昔楠廷尉正成後醍醐天皇の詔勅を奉し六十餘州皆賊なるに關せす其の一族を糾合して勤王の兵を擧け赤阪に城きて之を待つや兵僅に五百人(大敵たりとも懼れす)賊將北條高時武藏、相模等五州の兵十萬餘騎を以て西上せしむ賊軍赤阪に至り其の城を望見するに方百餘歩はかり乃ち憫笑して曰く隻手掀ふへきのみと(小敵を侮りしなり)爭ひて馬を下り肉薄して之を攻む正成士卒をして齊しく射らしめ立ろに千餘

人を斃す賊兵沮み卻き甲を卸し且息ふ而るに伏兵左右より起り正成二百騎を以て門を開き突出し三面合擊す賊軍大に驚き擾亂し器械を棄て走る翌日賊軍分れて二となり一は伏兵に備へ一は城を圍む正成豫め復垣を築き繩を其の外垣に懸く敵蟻の如くに之に附く正成繩を絶たしむ敵垣と共に墜つ乃ち大石巨材を投して七百餘人を殺せり居ること四五日賊軍攻具を修め楯を蒙りて進み鐵鈎を以て垣に鈎す垣殆んと崩る正成城兵をして人毎に長柄杓を執り沸湯を沃(ソソ)かしむ賊焦爛して退く賊兵是に於て營を築き城を環り持久の計をなせり已にして城中食盡く正成乃ち金剛山に入り時機の發展を待つ此時天下勤王の士未た起らす高時天皇を隱岐に徙し奉れり正成屈せす金剛山を出て赤阪城を回復し河内、和泉を徇へて悉く之を下す高時驚き六波羅の府帥に命し隅田、高橋二將をして兵五千人を率ゐ之を擊たしむ正成遠く渡部川の後に陣し其の一部を以て橋梁を監視せしむ賊望み見て之を易(アナド)り輙ち競ひ渡る(是卽ち小敵を侮るなり)監視隊伴り走る賊逃るを追ひ天王寺を過くる時正成其の主力を麾て疾く之を擊つ賊兵卻き走り復た制すへからす橋を爭ひて溺るる者無數賊之を愧ち更に宇都宮公綱をして五百騎を以て代り赴かしむ正成の部下迎へ戰はんと請ふ曰く我已に五千に勝つ何そ五百に畏れんと正成默然良久うして曰く勝敗の機離同に在り衆寡に非す公綱素より勇名を負ふ而して寡兵を以て敗餘を承く其の將士心を死に同うすること知るへきなり我たとひ之に克つとも損害必す多からん吾大任を受く前途甚た遠し始めより我士を傷へは後ち誰か我用を爲さん吾將に戰はすして之を屈せんとすと遂に營を拔きて去れり(小敵たりとも侮らすとは卽ち斯の如きを云ふなり)已にして公綱代り營す夜に入り四面を望むに皆炬火なり漸く多く漸く近つく公綱の兵甲を釋かすして敵を待つこと三晝夜に及ひ皆懼れて歸るを請ふ曰く楠氏の兵日に加はると公綱已むを得す

引き歸る正成復た出てて天王寺に陣せり以上の事蹟に由て之を觀れは忠勇義烈の軍人は毫も大敵を恐るることなく又小敵と雖も之を侮らす愼重以て最後の勝利を博するを見るへく又其の衆を恃み輕擧暴進する者は忽ち失敗するを悟るへし此事たるや亦文祿征韓の役に於て屢見る所なり文祿二年我征韓の諸將加藤清正は元山附近に在り小西行長は平壤に在り明主乃ち李如松を拜して大將となし六將軍を率ゐて來り我軍を拒かしむ其の數四十萬と稱す如松材武天下無双と稱せらる急に平壤を襲ひ之を陷る行長等諸將退て京城に集まる獨り清正孤軍を提けて咸鏡道に在り明將清正の忠勇絕倫なるを知らす虛喝して取るへしとなし辯士憑仲纓なるものを遣はし清正に媾和退却を勸む清正書記をして之に答へしめて曰く清正國命を奉して戰ふを知る明の令を聽て和するを知らさるなり歸て明王に告けよ我に弊甲凋兵あり近ころ事なきに苦む貴國來り伐つ已に命を聞く然るに咸鏡の途險阨にして騎比ひ行くへからす卒列をなすへからす兵の來る日に一二萬のみ吾迎へて之を擊ち日に一萬を殺さは四十日にして之を殲さん日に二萬を殺さは二十日にして之を殲さん已に殲して西を指し遼河を渡り燕京を破り大駕を海東に奉せん清正以て復命すへきなりと仲纓驚き走り歸る是時に當り明の軍勝に乘し鼓行して東す京城の將吏大同江以東の諸城をして守を撤し來會せしむ諸城皆命を聽く獨り小早川隆景、毛利秀包、立花宗茂之を肯せすして曰く吾輩力を竭し國に報ゆる固とに今日に在り且、明軍勝に驕る與みし易きのみと三奉行(石田三成、增田長盛、大谷吉隆)之を促すこと甚た急なり依て退き未た京城に至らさる三十里にして駐まる明軍進て開城に入り遂に臨津江を渡る査大受なるもの其の前衞を指揮す宗茂之を砥石嶺に擊破し百餘人を斬る如松の本軍嗣き至る隆景三萬人を以て之を碧蹄館に邀へ擊ち大に戰ふこと良久し宗茂、秀包と敵の側面を衝く如松始め火器を

以て平壤を襲ひ一戰志を得たり謂へらく日軍復た畏るるに足らずと銃礮を具へず白兵を以て接戰す我軍兵鋭く又利く縱横奮擊敵の人馬皆倒る敢て其の鋒に當るなし我兵呼聲天を動かし遂に大に明軍を破り首を斬ること一萬殆んと如松を獲んとす逃くるを追ひ臨津江に至り明兵を江に擠す江水之か爲に流れず如松痛哭すること徹夜敗軍を聚めて退却せり。

其の他本多平八郎の其の主家康の危きを思ひ手兵五百を率ゐて秀吉の大軍と竝ひ行けるか如き、鳥井元忠の伏見城を守れるか如き、谷中將の熊本城に嬰守して能く大西鄕の軍を拒止せるか如き、伊東元帥の海洋島の戰に於けるか如き忠義の爲に大敵を恐れず己れか武職を盡したるの例枚擧に遑あらず又近くは日清、日露の兩戰役に於て清の李鴻章、露の「亞歷斯布」等は我國の小なるを侮り我軍の少きを輕んし敢て我國威を辱しめ我國權を侵せしかは其の結果拭ふへからざるの失敗を

招くに至れり之に反し皇國軍人は世界の最大若くは最强國に對し少しも恐怖の念なく奮勵努力王の愾に敵し以て大に國光を世界に宣揚したり是卽ち　聖諭を遵奉せるの結果に外ならず。

されは武勇を尙ふものは常々人に接るには温和を第一とし諸人の愛敬を得むと心掛けよ由なき勇を好みて猛威を振ひたらは果は世人も忌嫌ひて豺狼なとの如く思ひなむ心すへきことにこそ。

私かに案するに眞の武勇なる者は常に能く義理を辨へ膽力を練り思慮を殫して事を謀り小敵たりとも侮らす大敵たりとも恐れす己れか武職を盡すの謂にして暴虎憑河の血氣にはやり粗暴の振舞なとするの謂にはあらす字形を以て之を觀るも武は戈を止むるなり卽ち剛健威烈雄斷以て能く暴を禁し兵を戢むるなり故に武は文と竝ひ立て敢て戻ることなし老子も亦曰く慈なり故に勇なりと故に勇は仁愛と相

伴ひ共に人倫道德の一と知るへし然るに昔支那にては大に文を尊ひ武を卑むの癖あり以爲らく武人は素と學なく禮に習はす目を瞋らして語難し頑頑勢を作し肯て法度に循はすと是を以て忠信明達の士は多く武事を修めす詩書禮樂を是習へり故に一且國難に當り文を去つて武に就くも畫策機宜に適せすして勝を千里の外に制すること能はす積弱の極其の國を失ひしこと一再ならす之に反し、皇國の如きは古へより武を尙ひ行ひに勇みしか中世文武の制度支那に模倣するに及ひ文尊武卑の弊に陷りたること　聖諭の初めに示されたるか如し今日に於ても世間猶此餘習を脫せさる如きものあるは深く惜むへしとす是畢竟偏文政治家又は空理文學者の罪なりと雖も吾人軍人も亦勇を恃みて猛威を振ふ等のことあるへからす史に傳ふ文祿征韓の役我外征の諸將多くは威ありて恩なく過くる所殘滅せしかは夷民逃匿し野に靑草なかりきと是則ち朝鮮は元　皇國の一部たりしに關はら

す久しく我に懷服せさりし所以なるへし軍人一人に就きて云ふも亦然り眞の大勇あるものは平生人と交はるには溫和を第一とし懇篤忠恕にして世人の尊敬愛慕を得る如く注意せさるへからす之に反し勇氣を恃み粗暴の擧動をなし猛威を逞うするに於ては遂には世人の軍人を見ること恰も豺狼の如く之を忌み嫌ふに至るへしと　聖諭に於て深く之を敎へ之を戒め給へるなり。

古來眞の武勇の士は平素極めて溫和なるを常とす實に阪上ノ田村將軍、加藤夜叉將軍の如き戰に臨みては其の威恰も鬼神の如くなりしも平常人に接するには極めて溫和にして小兒も之に懷けりと云ふ之を是眞に武勇の人と謂ふへし。

一、軍人は信義を重んすへし

凡信義を守ること常の道にはあれとわきて軍人は信義なくては一日も隊伍の中に交りてあらんこと難かるへ

し信とは己か言を踐行ひ義とは己か分を盡すをいふなり。

私かに案するに信義は社會全般の鏈鎖樞紐なり信義なければ國家は存在する能はすして混沌亂雜名狀すへからさる者とならん家庭は虚僞を以て齊治せらるるものにあらす國民も亦然り昔子貢政を孔子に問ふ孔子曰く(食を足らし兵を足らし民に信あらしむ)と子貢反問して曰く必す已むを得すして去らは斯の三者に於て何をか先にせん曰く兵を去らん子貢又曰く必す已むを得すして去らは斯の二者に於て何をか先にせん曰く食を去らん古へより皆死あり民信なくんは立たすと信義の重んすへきこと古今異なる所なし但し此孔子の言たる現今に於ては多少注意を要する點あり蓋し目下の軍隊なるものは國民の一大學校にして武技を練成すると同時に併せて國民の道德(信義を含む)を養成する所なれはなり又富國と强兵とは相伴ひ發達するを要するものにして如何なる富國も兵力振はさる時は遂に衰頽滅亡を免る能はされはなり孔子又曰く人として信なくんは其の可なるを知らす大車輗なく小車軏なくんは其れ何を以て之を行らんやと故に聖諭に信義を守ることは常の道なりと宣へり常の道とは所謂五常の道(仁義禮智信)にして獨り軍人のみならす一般に恪守すへき道德の一なりとの聖諭なり。

昔支那の賢人に延陵(吳)の季子と云ふ人あり上國に使して徐國を過く徐の君季子の劍を愛す然れとも口敢て言はす季子心に之を知りしも其の使命を果ささる爲未た之を獻せさりき歸途徐に至れは徐君已に死せり仍て其の寶劍を解き之を徐君の冢樹に繫きて去る從者曰く徐君已に死せり尙誰にか與へんと季子曰く然らす始め予心に已に之を許せり豈死せるの故を以て吾心に倍かんやと後世永く傳へて以て美談とせり又近代の豪傑西鄕隆盛は極めて然諾を重んせし人なり明治

の初年廟議士族の帶刀を禁せんとするや隆盛の初め之に贊せしを知るも猶其の意見を確めんか爲再ひ之に諮る所ありき隆盛毅然として曰く吉之助の一諾死を以て之を踐まんと吉之助とは隆盛の幼字なり。

人生處世の間に於て信義の重んすへきこと此の如し況や軍人は遠く鄕關を去り其の父母、親戚、資產、朋友を離れて一地に集合し而して一旦事變緩急あれは死生を共にして艱苦を分つへきものなるか故に上官は部下の爲部下は上官の爲互に相濟し又同僚間に於ても互に腹心を披瀝し相援ひ相助け以て全軍の名譽を發揚すへきものにして此間一點の虛僞私心あるへからす左に武將信義を守るの例として內外二名將の事蹟を擧けん。

昔獨逸の大將「ブリュッヘル」は千八百十五年六月十八日「ワーテルロー」の戰に英將「ウエリントン」に增援する目的を以て險惡なる道路を行軍せる時其の兵士を叱咤して頻りに急行を促せり而して其の部下苦難の狀を現はすを見るや「ブリュッヘル」は叫へり(吾人は進まさるへからす汝等は不可能なりと言ふも吾人は必す進まさるへからす予は「ウエリントン」に期を約せり汝等は吾をして背約者たらしめんとするか)と此の如くにして時機を愆たす戰場に會し大に拿破崙の軍を破れり當時獨逸の軍中に於て如何に信義を重んせるかは此「ブリュッヘル」の言に依て察するを得へし又彼の文祿征韓の役加藤清正機張に在りしか淺野幸長(長勝の子)使を以て來り蔚山の急を告く清正大に驚き直ちに赴き之を援はんとす左右諫めて曰く蔚山は孤城にして守り難し我れ寡兵を以て之に當る終に保つ能はさるへし寧ろ之を捨つるに若かすと清正曰く彈正(長勝の官名)吾に囑するに緩急其の兒を援けんことを以てせり然るに今之を敵に委棄せは何を以て天下に立たんと即ち部下五百人を率ゐて赴き援く明、韓の兵蟻附して城に迫る清正士卒に令

して大木巨石を投し之を卻く敵更に飛樓を起し銃砲を連ねて急に攻む城壁爲に震裂す清正、幸長と堅く守りて屈せず敵將力攻の不可なるを知り封鎖を行ひ糧道を絶つ我兵飢渴し紙を嚙み馬を食し馬盡くるに及ひ夜々城外に出て敵の屍を探りて其の携帶せる糧を取り以て飢を凌きしか會、天大に雪降り士卒指を墜すものあり然れとも清正意氣自若として益、守備を修め日に明兵を斃すこと數千此の如くにして其の年十二月より翌年正月に至る已にして豐臣秀秋、黑田長政等各地より來り援ふに會し清正、幸長城門を開きて出擊し前後合擊大に敵を破れり知るへし眞の武勇の士は極めて信義に厚きものなることを。

以上は能く信を守りて義を行ひたる例なるも之に反し信にして義に合せされは眞の信義とは謂ひ難し故に眞に信義を重んするの士は己れの本分を盡すに妨けなきにあらされは人と誓約をなさざるものなり傳へ云ふ支那に微生なる痴漢あり人と橋下に會するを約す然るに其の人未た到らざるに水大に至る微生約を守り柱を抱きて死せりと此等は己れの分を盡せるにあらす唯無益の約を墨守したるものにして信義とは謂ふへらさるのみならす却て後世の笑柄となれり。

されは信義を盡さむと思はは始より其事を成し得へきか得へからさるかを審に思考すへし朧氣なることを假初に諾ひてよしなき關係を結ひ後に至りて信義を立てんとすれは進退谷まりて身の措き所に苦むことあり悔ゆとも其詮なし始に能々事の順逆を辨へ理非を考へ其言は所詮踐むへからすと知り其義はとても守るへからすと悟りなは速に止るこそよけれ。

私かに案するに信義は軍人五武德の一なり軍人にして信義なければ

一日も隊伍の間に在ること難し故に軍人たるものは心になきことを言ふへからす我力の及はすと信することを約諾すへからす殊に其の事は己れの本分卽ち忠節を盡すに妨けなきや否やを勘考すること必要なり古語に曰く駟も舌に及はすと又曰く白圭(玉なり)の玷けたるは猶磨くへし斯の言の玷けたるは爲すへからすと言語然諾の愼まさるへからさるを云ふなり論語學而篇に有子の言を載す曰く(信義に近けれは言復むへし)と蓋し義に合せさる誓約は之を實行するに途なく結局不忠の臣となるか不信の人となるか二者其の一を擇はさるへからさるに至る　聖諭に所謂進退谷まりて身の措き所に苦むことありとは卽ち是なり昔英國の名將「ウエリントン」嘗て耳を病み一專門醫に之か治療を託せしことあり耳醫は種々の療法を試みたるに其の効なかりし爲斷然最後の方法として腐蝕劑の注射を行へり此療法は適當ならすして烈しき劇衝を起し眞に之を豫防せさるときは生命に關する

に至れり「ウエリントン」は友人なる他の醫師の治療に依り辛うして一命を保ち得たるも耳は全く聾するの不幸を見たり是に於て耳醫は其の療法の過失に依り病者の危險を招きたるを聞き謝罪の爲將軍を訪問せり將軍曰く(其の件に關しては最早多言を要せす足下は出來得るたけを盡したるなり)と耳醫は此事若し世上に流布せは自己一生の大事なりとし愁訴する所あるに對し將軍曰く(何人も知るものなし足下と予と堅く口を噤すれは可なり)と耳醫曰く(然らは閣下は從來の如く予の閣下に仕ふることを許されよ予は之に依りて閣下の予に對する信任の減せさることを世上に示すを得ん)と將軍乃ち斥けて曰く(否是偽なり故に予は爲す能はす)と實に「ウエリントン」將軍は熱心なる信義論者にして亦其の實行家たりしなり。

古より或は小節の信義を立てんとて大綱の順逆を誤り或は公道の理非に踏迷ひて私情の信義を守りあたら英

雄豪傑ともか禍に遭ひ身を滅し屍の上の汚名を後世まて遺せること其例尠からぬものを深く警めてやはあるへき。

小節の信義とは一時の約束、私事の誓約等にして大節即ち忠君報國の大義に關係せさるものを云ひ大綱とは人の必す操持すへき綱紀にして君國父師に盡すへき義務を云ふ又公道とは人の當然履行すへき大道にして其の意略大綱に同し私情とは恩惠を受けたる人又は親戚朋友等に關する恩愛情實を謂ふなり。

私かに案するに古來私情の信義を守り或は小節の信義を立てんとて禍に遭ひ身を滅し千歳拭ふへからさるの賊名を蒙りたるもの尠なからす是畢竟大綱の順逆を誤りたるか爲なり夫れ前にも述へたる如く君臣、父子、夫婦は人の大倫にして就中君臣の義最も重し父子之に次き夫婦之に次く萬一其の義兩立せさるときは其の輕きものを棄てて其

の重きものを取らさるへからす、而して我國に在りては君なるものは皇室の外に之なく皇室と國家とは即ち異名同體なり然るに中世に至り朝廷の政務漸く文弱に流れ政權武門の手に落つるに及ひ群雄四方に割據して只管其の部下に私恩を賣るを勉め部下たるもの亦唯直接に恩顧を受けたる所のものを愛戴し遂に神聖至仁なる皇室の無疆の鴻恩を忘るるものあるに至れるは悲むへし前九年及後三年の役陸奥の諸將士の多く阿部氏、清原氏に黨せる、承久の亂關東諸將士の北條氏に與みせる、延元の亂關東、九州諸國の將士の多く足利氏を援けたる、近くは明治十年の亂鹿兒島人士の多く西郷隆盛に與みせる是皆大綱の順逆を誤り公道の理非に踏迷ひたるの結果なり故に　聖諭に於て深く之を誡め給ふならん其の他平時兵營内に於て惡徒の煽動に惑ひ黨を組み上官に抵抗し至嚴の刑辟に觸れたるものあり又惡友と輕卒の約を結ひ多年勤勞の結果を皆無にするものあり事理を解せさるの情

狀愍むへしと雖も畢竟深く勅諭の御趣旨を奉戴せさるの致す所とす
戒めさるへけんや。

一、軍人は質素を旨とすへし

凡質素を旨とせされは文弱に流れ輕薄に趨り驕奢華靡の風を好み遂には貪汚に陷りて志も無下に賤くなり節操も武勇も其甲斐なく世人に爪はしきせらるる迄に至りぬへし其の身生涯の不幸といふも中々愚なり。

質とは體なり本なり文飾を加へさるなり素とは潔白なり巧飾を施さるなり即ち質素とは質實素朴にして浮華虛飾なきを云ふ旨は猶專一の如きなり文弱は文柔脆弱にして志氣體力共に弱きを云ふ輕薄は重厚の反對なり輕佻浮薄にして著實ならさるを云ふ驕奢は驕逸奢侈即ち分に過きたる生活をなすを云ひ華美淫靡にして風流逸樂に耽るなり貪汚とは財產金錢等の慾大にして心情の汚濁なるなり節操とは己れか本分を守り毅然として操守する所あり如何なる誘惑も其の心を曲くる能はさるを云ふなり。

私かに案するに驕奢は軍人の大敵なり而して其の害たるや主として文弱に流るるに在り抑も軍人なるものは强壯にして健全ならさるへからす各種の缺乏に耐へ最も辛辣なる困苦を忍はさるへからす武器裝具を背にして終日行軍し或は悍馬に鞭ちて長途の騎乘をなし而して毫も疲勞を感せさるを要す濕地に露營し風雨に暴露するも病に冒さるることなきを要す此等の劇動艱難を反復し而して一旦戰に臨むや勇氣滿々たるを要す飢渴を忍ひ炎熱を冒し亙寒に耐へ此の如くにして毫も健康を害せさるを要す今や世界の交通機關は日を逐ひて發達し物質上(衣食)の進步は年を逐ひて新たなるも軍人に對する如上の要求は毫も其の程度を減せさるなり實に往昔の戰爭は長年月に亙りしも冬季は概ね休戰し翌春好季節を待ち戰鬪を開始せり其の他軍の

運動緩慢にして過度に士卒に勞力を要求せさりき今や則ち之に異なり諸國工業の發達は長く戰爭を繼續するを許ささるを以て其の戰鬪たる苦難慘烈なり戰鬪は冬夏を擇はす而して行軍は最も長く且最も頻繁なり加之一會戰の時期は往昔に比し甚た長きに至れり昔「レープシック」の戰は二日を費し「ワグラム」の戰は四日に亙りたるのみなるも當時は以て長き會戰となせり然るに過くる戰役に於ける奉天會戰は實に十日間を費したり是故に軍人は疲勞困苦缺乏に耐ふるを要すること復た昔日の比にあらさるなり。

此の如き困難なる仟務を負擔せる軍人にして萬一驕奢に流れ温袍飽食に慣れ寒暑風雨を厭ふに至らは安そ能く戰場に於て困苦缺乏に堪ふることを得ん昔源平氏時代に源氏は關東の野に在りて弊衣粗食悍馬に鞭ち曠野を馳驅せるに反し平氏は京師に在りて驕奢を極め詩歌管絃を弄せしかは其の勝敗の數戰はすして明瞭なりし又蓋世の英雄

と呼はれたる佛帝拿破崙第一の如きも其の初め思慮明晰體軀健全軍務を執ること精勵無比なりし爲到る處連戰連勝の結果を得たるも西曆千八百十四年の戰役の終りには少しく其の健康を損ひたる爲畫策行動意の如くならす其の將星は遂に光を失ふに至れり是故に軍人たるもの平素質素を旨とし嗜慾を寡くし滋味を薄くし頑健鐵の如き身體を練成し以て異日戰場に於ける報效を期せさるへからす萬一軍人にして此注意を缺かんか忽ち輕佻浮華に趨り貨利、紛華、聲伎、遊宴乃至博奕、奇翫を好むに至り或は巧言令色嬉笑卑猥の語を出して以て通人粹士となし以て風流才子となすに至る是に於てか重厚の德消し著實の風滅ふ此の如くにして驕奢華靡の風漸次增長し遂には貨利を好むの念を生し或は不當の借財をなし或は不正の利得を企つるに到る事是に至れは君國に對する節操も戰場に於ける武勇の觀念も湮焉として消失し志操の墮落其の極に達し品性陋劣となり世人に擯斥

せらるるに至ること明かなり故に　聖諭に於て深く之を戒め給ふなり。

此風一たび軍人の間に起りては彼の傳染病の如く蔓延し士風も兵氣も頓に衰へぬへきこと明なり朕深く之を懼れて曩に免黜條例を施行し略此事を誡め置きつれと猶も其の惡習の出んことを憂ひて心安からねは故に又之を訓ふるそかし汝等軍人ゆめ此訓誡を等閑にな思ひそ。

此風とは驕奢華靡の風なり士風とは信義を重んし武勇を尚ひ禮義を重んする等軍人の氣風なり兵氣とは堅忍不拔勇往邁進する軍人の氣慨なり頓には俄然なり等閑は粗略なり免黜條例は明治十年二月發布せられたる規則にして其の箇條は第一、品行不正第二、交際不正第三、怯

懦畏避第四、抗言悖頑第五、職務不治第六、不典失儀第七、鬪爭とす。

私かに案するに惡例の傳播は善例よりも速に弊風の流行は美風よりも早し譬へは彼の山に登るは難く降るは易きか如く彼の火の原を燎き嚮ひ近つくへからさるか如し夫れ昇平久きに亙るときは國民は漸次尚武剛健の氣質を失ひ其の資產に依て逸樂することを知るのみ是に於てか先つ消滅するものは質素の德なり蓋し世人は有形上の嗜好に耽溺し隨て其の需用を增加す奢侈の物品は變して必要品となり逸樂の希望肉體の快樂は社會全般に充滿するに至る質素の德一たひ消するや勤勞力行の風之に次き報國心之に次き武勇節操又之に續て去る是に至りては是情慾及不德の時代なり世人は復た嚴格なる規律に堪ふる能はす困難なる勤務を完うする能はす外形上虛僞の進歩に眩惑し誤て文明と呼へる一種の塑像を信仰し貪婪及浪費は義務の轡勒を破却し道德の羈絆を脫して社會の制裁を受くることなく滔々とし

て復た止まる所を知らす是に於てか國家は明白なる衰兆を現はす即ち經理の紊亂、家庭の醜聞、貞操の妨碍、子女の殺害、放蕩、自殺、大銀行の破産、不潔なる雜誌黨派新聞上に誇張せる不名譽事件等の續出是なり換言すれは國家は外觀上甚た美なるか如きも其の實恰も成熟せる果實の將に枝を辭せんとするか如し岌々乎として夫れ危き哉。

社會の風潮此の如くなるに關せす泰然自若奢侈を敵視し品位を鍛練し武德を喚起し以て社會一般の模範たるへきものは軍人なり萬一軍人にして腐敗せる社會の風潮に伴ひ驕奢華靡の風を好むに至らんか此惡習弊風は忽ちに軍隊内に傳播瀰漫すること恰も流行病の如くならん而して質實高尚なる士風も堅忍勇敢なる兵氣も俄然衰頽すること炳として火を睹るか如けん。

先帝深く此事を宸念あらせられ免黜條例を施行し略此事を戒められしか玆に再ひ之を訓へ諭し給ふ吾人軍人たるもの深く此　聖諭を服

膺し決して質素の德を失はさることを力めさるへけんや。

次に少しく其の細部に亙りて述へん。

質素なるものは元來其の分に過くるの生活を戒むへきものにして濫りに財を吝み吝嗇に陷るは不可なり故に將校は將校、下士は下士、兵卒は兵卒各其の分に應し居室服裝を正しくし以て軍人たるの威儼を保つへきものにして唯其の分に過くることは深く戒めさるへからす殊に軍人は負財を戒むへし實に志操を低下し品位を墮落せしむるもの負財より甚しきはなし米將軍「華盛頓(ワシントン)」は負財を畏るること强敵よりも甚しと云へり義俠心に富める人は往々他人を救はんとして負財をなすことあるも是れ稱すへきことにあらす蓋し之か爲に併せて自身をも陷れ遂に君國の爲に盡す能はざるに到れはなり。

凡て人は飲食の慾を節せさるへからす孔子曰く(士の道に志して惡衣惡食を恥つるものは共に議るに足らす)と孟子曰く(飲食の人は人之を

賤む其の小を養ひて大を失ふか爲なり)と宋の汪信民曰く(人常に菜根を咬み得は百事做すへし)と山鹿素行は其の武教小學中に述へて曰く(飲食量に過くる時は病を生し爭を起す否らされは睡眠至り骨體重く事々怠多し則ち家業を忽かせにして職とする所の事凝滯す)と常人且然り況や困苦缺乏に耐ふへき軍人に於てをや。

軍人は特に飲酒を節すへし軍人にして往々酒を嗜て厭くことなく曠蕩を以て豪傑となし杯を銜むを以て淡泊となし遂に禮儀を亂り軍紀に觸るるものあり甚しきは肺を損し腸を腐らし患不測に生す豈痛ましからすや昔歐洲の名將瑞典王「査理」(シャルル)十二世尚少かりしとき一日飲酒過度昏迷して其の祖母なる太后に對し無禮の言動をなせしことあり翌日人之を王に告く王卽ち太后に謁して其の罪を謝し且過を再ひせさる爲終身酒を禁することを誓へり爾來斷然其の言を守り一滴の酒を口にせす王は一世未た曾て其の食物の善惡を可否せしことあらす簡單質素なる食事の後騎馬して長距離を馳驅し夜は外套を著けたるまゝ草野に布きたる寢藁上に臥眠す之に依り王は如何なる疲勞と雖も犯す能はさる如き强健なる身體を練成せり是其の極北の一寒國に起り彼の英邁非凡なる露帝「彼得」(ペートル)第一を苦しめたる所以ならんか之に反し希臘の「亞歷山德」(アレキサンドル)大王は不出世の英雄にして兵を用ふること神の如くなりしも飲酒過度なりし爲享年僅に三十二にして夭折するに至れり

女色聲樂を戒むへし由來好色は武德と一致せす孔子曰く(根や慾安そ剛を得ん)と好色の者は武運の長久を得す我源廷尉義經、新田羽林公義貞の如き其の智勇忠節は大に多とすへきも其の武運拙なるか如き鑑みるに足るへし其の他支那の姐妃、楊貴妃の如き、西歐の「クレヲパトル」「アントワネット」の如き古來女色の禍亂を釀成せしこと一再に止まらす昔元の將「伯顏」久しく北邊を守りしか王子「鐵木耳」之に代りしとき

王子酒を擧けて之に餞して曰く公去る何を以て我に敎へん伯顏酌む所の酒を擧けて曰く愼むへきものは此酒と女色とのみと宋の胡澹庵は氣節の士なり上書して奸賊秦檜等を斬らんと請ひ罪を得て海外に謫せらるゝこと十年赦されて北に歸るの日湘潭胡氏の園に飲む詩を作りて曰く君恩許レ歸此一醉。傍有三黎頰生三微渦一と黎とは侍妓黎倩を指すなり朱文公之を見て絶句を題して曰く十年浮レ海一身輕。歸對三黎渦一却有レ情。世上無如人慾險。幾人到レ此誤平生。と澹庵因て書して以て自ら警めたりと云ふ其の他希臘古代の名將「テミストークル」は一日宴席に於て一曲を彈せんことを請はれたるに對し有名なる答をなせり曰く(予は國を治め兵を用ふることを知るも不幸未た嘗て琴を彈することを學はす)と又聞く米將「克蘭士」は曾て美聲を以て有名なる一名妓の將軍の爲に一曲を唱へんと乞へるに對し答て(乞ふ成るへく短き者を)と云へりと

實に質素は人の大德なり而して特に軍人に必要なること前に述へたるか如し皇國の軍人は古へより質素を旨とせり北條氏の如き勤儉質素を以て有名なり元龜天正の頃に至り此武德は益〻發揮せり室直清の說話に之あり征韓の役日根野備中守家貧にして軍裝を調ふる能はす三好新右衞門を介して黑田如水より銀百枚を借る後ち歸朝の後新右衞門と與に如水を訪ひ恩を謝せり如水面接し少らくありて家人を呼ひて曰く(嚮きに貰ひし鯛を三枚にをろして其の骨を只今吸物にして出すへし)と兩人聞きて心に快からす饗終るや三好銀を懷中より出し之を如水に返さんとす如水曰く(最初より貸しぬる心にてはなし合力する心なり)と兩人再三請ふも如水之を受けすして已む飲食の爲には人の贈りし魚菜をも濫りに用ゐす而して賓客の面前にて之を言て忌むことなし然るに朋友の急を救はんか爲には百金を重しとせす此等の事を觀るも當時の士風質素實直にして而も義を忘れす心事潔白な

ることを知るへし支那に在りては予は漢の丞相諸葛亮、西歐に在りては「チュレンヌ」を推さんとす「チュレンヌ」は佛國「路易」第十四時代の名將なり此偉人は退職後古羅馬の豪傑の如き非常の質素なる生活を以て巴里城内に居住せり人一見其の將軍たるを識別する能はさりき一日散策の途職工の一群適さに毬を弄ふに遇ふ職工其の將軍たるを知らす之に勝敗の審判をなさんことを乞へり將軍快諾、杖を以て距離を測り勝敗を告けしか敗者服せさりしかは將軍微笑し再ひ杖を以て距離を測れり會、數名の將校此處を過き將軍を見て恭く敬禮を行ふ職工等之を見て始めて其の大將たるを知り恐懼して罪を謝す將軍簡單に戒て曰く《予か諸子を欺くと思ふは甚た惡し》と將軍は時として觀劇に赴けり一日獨り其の第一席に在りしか適、數名の從者を隨へたる田舍紳士入り來り其の全席を讓らんことを强請す將軍之を拒みしかは紳士は怒て將軍の帽子手套を座外に投棄せり將軍は自若として下方に在りし一貴公子に之を拾收せんことを乞へり貴公子顧みて唯々として之を服行す田舍紳士は其の言動に因り始めて其の「チュレンヌ」大將たることを知り恐懼して將に退席せんとす「チュレンヌ」徐ろに之を制し且曰く《互に少しく席を讓らは容易に皆人の爲に座席を發見するを得ん》と其の謙讓質素概ね此の如くなりき又支那の忠武侯諸葛孔明の忠勇無双我楠河州正成に彷彿たるは人の知る所なり侯曾て漢帝に上表して曰く臣成都に桑八百株薄田十五頃あり子弟衣食自ら餘あり別に生を治めて以て尺寸を長せす臣死するの日内に餘帛あり外に餘財あらしめて以て陛下に負かすと卒するに及ひ果して其の言の如くなりきと云へり。

要するに質素は百德殊に武德の根源なり而して要は分を守るに在り吾人豈蹇々 聖諭を服行せさるへけんや。

右の五箇條は軍人たらんもの暫も忽にすへからすさて

之を行はんには一の誠心こそ大切なれ抑此五箇條は我軍人の精神にして一の誠心は又五箇條の精神なり。

私かに案するに前文に示されたる忠節、禮儀、武勇、信義、質素の五箇條は軍人の五武德にして實に日本軍人の精神魂魄なり之を實行する之を武士道と謂ふ卽ち大和魂の精華なり軍人にして此武德を備へさるものは精神なき木偶塑像と擇む所なし故に軍人たるものは流離顚沛の際も寢食寤寐の間も拳々之を服膺し決して之を忽諸に附すべきにあらす而して之を實施するには一の誠心あること緊要なり今夫れ江河は一の源泉の滾々に出つ而して其の大なるに及てや洶汪雄渾艨艟之に泛ひ蛟龍之に棲む今夫れ樹木は一粒種子の發生せるなり而して其の大なるに及てや蓊鬱密茂枝葉天を蓋ひ禽鳥之に巢ふ誠の德に於けるや猶源泉の江河に於ける、種子の樹木に於けるか如し誠は德の本なり心に一の誠あれは百德之に隨て生ず發しては忠節となり禮儀となり武勇となり信義となり質素となる而して其の源は卽ち一誠に歸す古人の所謂之を放ては六合に彌り之を卷けは退て密に藏ると云ふもの是なり　先帝陛下の御製に曰く(鬼神も泣かする者は世の中の人の心の誠なりけり)又曰く(人は唯誠の道を守らなん高き賤しき品はありとも)と。

心誠ならされは如何なる嘉言も善行も皆うはへの裝飾にて何の用にかは立つへき。

私かに案するに世に僞善あり僞行あり卽ち自ら爲にする所ありて善言を吐き野心を充たさんか爲に善事を行ふものあり此の如きは恰も源泉なき行潦の忽ち乾涸するか如く又根柢なき樹木の忽ち枯死するか如く終には暴露して何の用をもなすへきにあらす昔支那に王莽なる奸賊あり漢帝の姻戚にして才智に富みけるか陰かに帝位簒奪の逆心を蓄へ上を敬ひ下を惠み謙讓士に下り大に天下の人心を收攬した

るも其の實誠心より出たるにあらす唯人望を博して天下を取らんとの野心に基きたる僞善なりしかは遂に罪惡暴露して身を亡はすに至れり此の如きは僞善僞行の大惡を釀したる一例なりとす但し支那には古來此の如き行爲頗る多し畢竟其の祖先たる湯の武王の其の主夏の桀王を放ちたる如き、周の武王の其の主殷の紂王を弑せしか如き即ち智、德、を、負、ひ、强、力、を、恃、み、て、其、の、君、主、に、背、く、も、以、て、大、逆、となさ、さ、るの習、僻、あ、り、其、の、將、來、に、於、け、る、國、家、の、騷、亂、生、靈、の、塗、炭、豫、想、す、る、に、難、か、らす、唯、當、時、四、億、萬、人、中、二、男、子、の、在、る、あ、り、道、を、信、す、る、こ、と、篤、く、自、ら、知、ること、明、か、に、一、國、一、州、之、を、非、とす、るも、力、行、して、惑、はす、天、下、之、を、非、とするも、毅、然、として、屈、せ、す、其、の、誠、忠、清、節、暗、に、皇、國、の、士、道、に、合、せ、り、其、の、人を誰とか爲す伯夷、叔齊是なり史に稱す周武の將に紂王を攻めんとするや車上木主を安し號して文王(周武の父)となし東の方紂王を攻む伯夷、叔齊馬を叩て諫て曰く父、死して、葬らす、爰に、干、戈に、及、ふ、孝、と、謂、ふ、へ

けんや、臣、を、以、て、君、を、攻、む、仁、と、謂、ふ、へ、けんや、と左右之を殺さんと欲す呂商(周武の總參謀長)曰く此れ義人なりと扶けて之を去らしむ周武已に殷朝を亡ぼす天下周に歸服す然るに伯夷、叔齊之を恥ち周の粟を食ふを屑しとせす首陽山に隱れ薇を採て之を食ひ遂に西山に餓死せりと是より支那は亂臣賊子迹を接し强弱互に爭ひ智德相競ひ戰亂續出人民の苦難幾千年なるを知らす畢竟其の上下誠意を缺けるの結果なり後年我國水戸義公深く伯夷、叔齊の人と爲りを慕ひ祠を建てて之を祀る現に小石川後樂園に在るもの是なり。

心たに誠あれは何事も成るものそかし。

私かに案するに誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり誠あれは勉めすして中り思はすして得なし得其の干格支吾する所あるは誠の未た至らさるなり皇國中世以降天下の人心皆皇室の式微を慨せり殊に前記水戸義公の如き、平田、本居、佐藤、賴諸氏の如き時局の不可なるに關

せす誠心誠意大義を唱道せり又去る日清、日露兩戰役の際の如き皇國上下誠心誠意擧つて皇師の戰勝を祈れり而して其の結果今日の盛世を見たるに非すや個人一身に於ても亦然り中庸に曰く唯天下の至誠能く其の性(性は卽ち理なり)を盡すを爲す其の性を盡せは能く人の性を盡す能く人の性を盡せは能く物の性を盡す能く物の性を盡せは以て天地の化育を贊くへし以て天地の化育を贊くへくんは以て天地と參なるへしと又曰く至誠息むことなし息まされは久し久しけれは徵あり徵あれは悠遠なり悠遠なれは博厚なり博厚なれは高明なり博厚は物を載する所以高明は物を覆ふ所以悠久は物を成す所以なり博厚は地に配し高明は天に配す悠久は疆りなし此の如きものは見さすして章はれ動かすして變し爲すことなくして成ると一言以て之を蔽はん　聖諭に所謂心たに誠あれは何事も成るものそかしと是なり然らは卽ち誠を行ふの要如何　先帝陛下の御製に曰く(目に見へぬ神の心

に通ふこそ人の心の誠なりけれ)と又昔劉元城、司馬溫公に見へ心を盡し己れを行ふの要以て終身之を行ふへき者を問ふ溫公曰く其れ誠乎劉問ふ之を行ふ何をか先にせん公曰く妄語せさるより始めよと。明の劉宗周(戢山と號す劉氏人譜を著はす)は清忠亮節の士なり嘗て曰く造物人を生するに其の耳目を兩つにし其の手足を兩つにし而して獨り其の舌を一にす意ふに之をして多く聞き多く見多く爲して言ふこと少ながらしめんと欲するならん其の舌又之を口中の奥深に置き齒を以て城の如くにし唇は郭の如く鬚は戟の如く三重に之を圍む其の藏るるの固からすして輕々しく出るを恐るる者の如しと劉氏は又世俗の犯し易き所の者數條を列記せり左の如し。

(凡そ一事にして人の終身に關するものは縱令實見實聞するも口に出すへからす凡そ一語にして我か長厚を傷くることは閨談酒謔と雖も言に形はす勿れ喜極まるときは多く言ふ勿れ怒極まるときは多く言

ふ勿れ醉極まりたるとき多く言ふ勿れ喜ふ時の言は多く信を失し怒る時の言は多く禮を失ふ。

(言語の當さに愼むへきは正さに快意の時に當り快意の人に遭ひ快意の事を說くときに在り。

(面諛の詞は有織者未た必すしも感せさるも背後の議は之を銜むもの骨に刻むに至る。

(人情の厚密なるとき盡く密私の事を以て之に語るへからす恐らくは一旦歡を失へは前言憑て口實とならん歡を失するのときに至るも亦盡く切實の語を以て之に加ふへからす恐くは念平き好を復するとき前言愧つへし。

(妄語せす、多語せす、人の隱事を道はす、人の微過を摘ます、己れに干涉なきことを言はす、人に關係あることを言はす、人を論するに短を拾ひ長を棄つることなく、己れを論するに枝に登りて本を忘るることなく、交り淺きものには輕々しく言ふこと勿れ、調別なるものには與に强言する勿れ、陰刻なるものには與に衷情を言ふ勿れ、輕疎なる者には與に密事を言ふなかれ、財を語るも非分に及はす、色を語るも邪緣に及はす、官箴を彈射する勿れ、人品を月旦する勿れ、愛憎に偏せす、風聞を信せす、經濟を談するの外寧ろ藝術を談せよ以て用を給すへし日用を談するの外寧ろ山水を談せよ以て機を息すへし心性を談するの外寧ろ因果を談せよ以て善を勸むへし)と。

歐米の人は由來雄辯を貴ふ然れとも雄辯と多言妄語とは自ら趣を異にす「フランクリン」の十二箴中沈默の項に曰く(己れに益あり人に益あることに非されは言ふ勿れ)と昔希臘の將軍「エパミノンダス」は人と爲り沈勇誠實戲言せす笑ふこともまた稀なりき然れとも其の軍中にあるや雄辯部下を感動せしめたりと云へり史に又稱す佛帝拿破崙第一は母の薫陶を受け其の含蓄默思の氣質を養成し終身之を變せさりしか

は後ち拿破崙は己れの功名を以て全く母の賚ものなりと云へりと。
然りと雖も言ふへくして言はさるは奸なり知りて默するは僞なり要は多言多語以て至誠の德を傷けさるに在り皇國の爲皇軍の爲權變機略を必要とするの場合は格別とし其の他は凡て心言一致以て至誠の德を養ふへきものとす。

況してや此五箇條は天地の公道人倫の常經なり行易く守り易し。

天地の公道とは世界萬國の開行はれさる所なく通せさる所なき公明正大の道なり人倫の常經とは彝倫の大綱卽ち君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の間に於ける倫理にして人の常に操守すへき綱紀なり。

私かに案するに戰は全然之を廢する能はす例へは彼の火山の時とし て爆發し耕地森林を侵害するか如く又彼の風雨の時として殺到し家屋人畜を破殘するか如し火山の爆發、風雨の狂暴は實に地上の一大損

害なるも然れとも火山は恒星の要素にして一日も缺く能はす又彼の風雨も萬物の發育上全く之を廢する能はす是卽ち小を殺して大を助くるの天道なり實に人生ありて以來既に幾千年而して世人は未た純然たる理義の人たる能はす今日の世界の人は猶羅、希、殷、周時代の人の如し上古未開の人は劍戟を以て相搏ち近世文明の民は銃砲を以て相屠る其の進步せる所のものは人にあらすして器に在り德にあらすして物に在り。

人常に曰く進步進步と進步なるもの果して何くにあるや百需物品の充足に在るか百需の充足は嫉妬、貪婪、情慾、不德其の他諸種の惡習を生するを如何にせん事物の平等に在るか是何等の迷謬そや盲人國に王たるものは眇者を捨てて安くにか在る然らは則ち眞誠の進步は富裕に在るか曰く否勤儉に起りて安逸に亡ふるは世間盛衰の常態にあらすや是に由て之を觀れは事物の進步は敢て賤むへきにあらすと雖も

然も吾人の爲に天鄕淨土の途を啓く所以のものにあらざるなり然らは則ち智識の進歩に在るか曰く未たし智識は時ありて殺害の用となるのみならず空妄虛誕の語を以て之か學說を作爲するを得るものなり。

是故に眞正の進歩なるものは夫れ唯道德の進歩に在るのみ然るに孔、孟、耶、釋其の道を說てより已に二千年人心毫も古へに異ならす其の智識の增進するに伴ひ德義は却て古代の人に劣ることあり佛國の學者「佐理英兒」氏曰く(人の善を好み惡を忌むの心は已に足れり胡爲そ其の行の更に改まる所なきや曰く故あり夫れ人の良心あるは猶天の日月あるか如く照ささる所なきなり然れとも一旦雲霧に蔽はるるに及てや人生忽ち暗黑となる夫れ鳥は時ありて地を離れ高く飛て雲を破り蒼兮たる大空の中に翺翔す然れと其の翼疲れ體飢ゆるに及てや下りて草、芽、昆、蟲を喙み而して遂に復た其の栖中に歸るなり人も亦此の如

し好て實理を放棄して虛妄に耽醉す空想界上百物具さに備はるを見て塵界の情頓に消す以爲らく已に神仙の伍に入れりと然り而して人は其の高尙傲慢なる自負心に關せす再ひ彼の神鄕より降下せさるを得さることあり遂に其の所謂悲慘卑穢なる地上に墮落し來るなり此迷遊たるや人をして其の本國を忘れ人事を厭ひ遂に吾人を率導する所の法令を無視するに至らしむ豈危殆ならすや)と。

是故に戰は遂に人世に避くへからす少くとも萬世一系の天皇此大地を統御し給ふの日到來するにあらされは世界人類の爭亂紛擾は全く跡を絕つに至らさるへし然り國民は皆兵ならさるへからす　聖諭に曰く兵力の消長は是國運の盛衰なりと苟も他國の橫暴を防き其の惡逆を膺懲し以て天下の正道を行はんには一旦緩急あるに當り國民皆戈を執りて義勇公に報するの覺悟なかるへからさるなり。

故に　聖諭の五箇條は獨り軍人の恪守すへきものなるのみならす國

民一般に率由遵守すへき所のものなり換言すれは天地の公道人倫の常經なり隨て特に苦難奇拔のことあるにあらす平々坦々行ひ易く守り易きの大道なりと知るへし。

汝等軍人能く朕か訓に遵ひて此道を守り行ひ國に報ゆるの務を盡さは日本國の蒼生擧りて之を悅ひなん朕一人の懌のみならんや。

明治十五年一月四日

御名

此道とは聖訓五箇條の道德卽ち忠節、禮儀、武勇、信義、質素なり之を約すれは一の誠心なり國に報ゆるの務は卽ち忠節に同し盡すとは心身のあらん限りを致すなり蒼生とは靑人草卽ち古來皇室國家の仁風慈雨に浴し生々繁榮せる所の臣民なり。

私かに案するに兩國相戰ふや其の國民中德義の優秀なるもの卽ち忠君、愛國の志厚く軍紀嚴正に勇往不屈信義を重んし勤儉を尙ひ以て軍備を充實せるものは必す勝つ之に反し徒らに空論に趨り柔弱怯懦怠慢放縱乃至驕奢華靡なるものは必す敗る是故に戰は兩國民の品位價値を鑑識し其の班位を斷定する所の一の神聖なる裁判なり而して軍人は天に代り(少くも各國割據統一せられさるの間)此神聖裁判を行ふ所の判官なり卽ち其の職たるや實に高尙榮華なり加之今や戰は漸次古代の蠻習を脫し駸々として其の實行法を改良す(彼我の死傷者を收容し殘酷不道の行爲を禁する等)「佐理英兒」氏曰く(他年戰は其の野蠻の惡習を脫し世人は戰を以て神聖なる義務、天則に對する服從、國家に對する大義となし而して諸武德の光輝は粲爛として人目を眩すること恰も彼の天尊の光環の如くなるの日あるならん)と。又我帝國憲法第三十二條に曰く(本章に揭けたる條規は陸海軍の法令又は紀律に抵觸せさるものに限り軍人に準行す)と。

軍人の責務たるや此の如く夫れ高尚なり偉大なり故に軍人は夙夜本聖諭を服膺し至忠至誠なる精神と高尚剛邁なる品格と鋭利機敏なる才能とに依り　陛下の股肱國家の干城たる任務を全うせさるへからす此の如くんは獨り　上御一人の御滿足せらるるのみならす我全國民は軍人に酬ゆるに瞻仰と尊敬とを以てするならん。

大正七年五月二十五日印刷
大正七年五月二十八日發行

東京市麹町區飯田町二丁目五十二番地
發行者　枝國夘三郎

東京市麹町區飯田町二丁目五十二番地
發行所　偕行社

東京市麹町區隼町四番地
印刷者　小林又七

陸軍省構内
印刷所　小林又七印刷所

人工17-10

終